産大法学　55巻3・4号（2022.1）

書評誌『読書人』の国内思想戦

――1940年代前半日本の言論空間研究（3・完）――

植　村　和　秀

はじめに
第1章　『読書人』創刊前夜の『東京堂月報』
第2章　1941年12月の『読書人』創刊と1942年の出版界の状況
第3章　創刊号と1942年前半の『読書人』（以上、第55巻第1号）
第4章　1942年後半の『読書人』
第5章　1943年前半の『読書人』（以上、第55巻第2号）
第6章　『読書人』第3巻第7号の京都学派弾劾
第7章　1943年後半の『読書人』
第8章　1944年前半の『読書人』
おわりに（以上、本号）

第6章　『読書人』第3巻第7号の京都学派弾劾

本号によって、書評誌『読書人』は異例なほどの悪名を残すこととなった。その特集「哲学書批判」は、88頁中、新刊分類目録などを除く本文48頁のほぼ全てを用いての罵倒となっている。標的となったのは、西田幾多郎とその門下生たち、いわゆる京都学派の人びとである。彼らは国内思想戦の主敵とされ、異様な攻撃を受けることとなったのである。

京都学派攻撃の経緯について、『太平』1946年2月号掲載の西山正夫「京都哲学派弾圧の経緯」は、和辻哲郎の国内思想戦論者に対する反対が導火線となったと指摘する。（西山：27）すなわち、日本出版文化協会（文協）の推薦図書を巡って、和辻は陸軍の鈴木庫三と1941年11月に激論を交わしたとし、その内容の一部を紹介するのである。

「その際の議論は、国内思想戦といふが、それはなにを、どうして討つのか、といふ和辻博士の質問に対して、国内にある外国的思想を討つので

あり、それは各個撃破の戦術で片端から討つのである、といふ鈴木少佐の答であった。これに対して和辻博士は、それでは、それは内乱ではないか、といひ、鈴木氏はこれにひどく激昂した、といふことである」。（西山：26）

なお、佐藤卓己の『言論統制』によれば、当時の鈴木は中佐であり、和辻は海軍省調査課長である高木惣吉大佐に協力していた。（佐藤：339-340）高木が1964年に和辻夫人に送った書簡には、「出版文化協会の仕事は思想戦を敢行して不逞思想を弾圧するにある」という趣旨で、鈴木が「国内にある外国的思想、すなわち自由主義思想を討つ」と主張したのに対して、和辻が、「そういう方法はまさに内乱の誘発にほかならぬではないか」と反論したと記されている。（佐藤：342-343、和辻照：261-262）西山の終戦直後の記述は、ほぼ正確であると言えるであろう。

この西山について、仙石和道は、先行研究も踏まえた上で哲学者の池島重信の筆名と指摘している。（仙石：179、187）池島は三木清の法政大学での門下生であり、激論の頃は文協雑誌課長である。（仙石：181、187）ただし、1942年6月の文協内紛では辞表を出したとの記述があり、法政大学教授の松本潤一郎文化局長を支持したと推測される。（帆刈：109）

他方、和辻と鈴木の因縁については、佐藤卓己がその経緯を解説している。和辻が京都帝国大学から東京帝国大学に転じ、吉田静致教授の後任として文学部倫理学第一講座を担当したのは1934年のことであった。（和辻照：394）鈴木庫三は中尉のときに日本大学文学部で吉田と、吉田の「後任と目され」た長屋喜一講師に学んでいた。（佐藤：158、340）夜間の勤労学生である。しかし、恩師の長屋は和辻の就任で文部省教学局教学官に転じており、鈴木が倫理学研究室の一新を「どのような思いで眺めていたかは想像に難くない」と佐藤は指摘している。（佐藤：341）なお、西田幾多郎と和辻を執拗に弾劾した文部省の小沼洋夫も吉田静致門下である。

さて、西山こと池島によれば、「思想戦の第一義が、外国的思想家の各個撃破といふことから、維新者の信條の述志といふことに」移行する一方で、和辻の内乱発言への反発は京都学派への敵対となり、そこに新国学派の活動が絡み合って、急激で強烈な展開が生じることとなった。（西山：

27）とりわけ1943年には、和辻や京都学派に対する攻撃がさまざまな雑誌に続々と掲載され、その執筆者の多くは『読書人』の執筆者でもあった。（西山：26、29）攻撃は『読書人』以外の雑誌でも、時には和辻哲郎も標的となって執拗に行なわれたのである。

本稿の冒頭に述べたように、縮小する言論空間では競争相手を空間の外に押し出しやすく、また逆に、自分も押し出されやすい。1943年には戦況が悪化しており、言論空間はますます縮小の一途を辿っていた。国内思想戦を呼号する人びとは、この状況のなかで、自己の敵を政治的に排除することにますます必死になっていたのである。

それでは、京都学派はなぜ狙われたのか。まず第一に、京都学派の活躍がますます顕著となり、思想戦遂行上の重大な競争相手となったことが挙げられるであろう。西田幾多郎の門下生たち、哲学者の高坂正顕、西谷啓治、高山岩男と歴史家の鈴木成高は、『中央公論』誌上に「世界史的立場と日本」「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」「総力戦の哲学」と題する三回の座談会を掲載し、知識層から大きな反響を得ていたのである。

この座談会の記録は、1943年3月25日付で単行本『世界史的立場と日本』として中央公論社から刊行された。中央公論社の黒田秀俊は、「またたくまに初版1万5千部を売りつくし、再版もすぐに売り切れたが、陸軍の意をうけた出版会の圧力で、以後の増刷はできなくなった」と記している。（黒田1975：31）

京都学派の活動は海軍の高木惣吉と提携してのものであり、1942年2月12日付の秘密会合記録には、「海軍省の意見は思想戦は対外的にやり、対内的には止めるべきであると云ふ点にあり、我々もそれに」従うとある。（大橋：65、177）この会合には前記4名の著者に加えて木村素衛、宮崎市定、日高第四郎が参加し、記録者は大島康正である。（大橋：175）京都学派が海軍派であるならば、たしかに陸軍が敵視しても不思議ではないであろう。

ただし、日本出版会の理事・書籍部長には、1943年4月に斎藤晌が就任していた。（帆刈：287）西山こと池島は、「斎藤氏がなした京都学派に

対する不当な圧迫ならびに自派の著者出版社に対する行きすぎた擁護は部下の奮激を買った」と記しており、（西山：28）陸軍の意向以前に、『読書人』誌上で西田幾多郎たちを仇敵視してきた斎藤が率先して出版を妨害した可能性が高い。ちなみに、フランス文学者の河盛好蔵は、当時、辰野隆の紹介で日本出版会の書籍部学芸課長に就任していた。（河盛：110-111）文学、芸術の担当である。（帆刈：280、283）河盛によれば、斎藤は「大の岩波嫌いで、岩波の出版物にはきわめてきびしかった」そうである。（河盛：112）おそらく、中央公論社も斎藤の好む出版社ではなかったはずである。

いずれにせよ、陸軍内部の敵意とは別に、京都学派に年来の敵意を抱く知識人たちも存在していた。斎藤には斎藤の年来の敵意があり、それは紀平正美をはじめ、他の攻撃者にも同様であった。他方で、『中央公論』への攻撃もこの頃さらに強まっており、京都学派攻撃と連動している可能性は否定できない。『読書人』本号の刊行された同月号の『中央公論』は、きわめて異例なことに、事実上、休刊を強制させられていたのである。

この頃、中央公論社への敵意は、さまざまな形で陸軍内部に蓄積していた。中央公論社の畑中繁雄は、海軍との関係から、「京都学派は、はからずも、深刻な陸海軍抗争史のうちにまきこまれ」る一方、陸軍との疎隔もあって、「私たち総合雑誌編集者の一部が、陸海軍離間の陰謀を画策している、などとの、まことしやかな風説を一部にながされ」たと回顧している。（畑中：66-67）

同じく中央公論社の黒田秀俊は、高坂正顕の論文「思想戦の形而上的根拠」の6月号掲載が不祥事とされ、大本営陸軍報道部の杉本和朗少佐と阿部仁三嘱託、情報局の竹本孫一第二部出版課長と下谷駒之助嘱託から厳しく非難されたと回顧している。（黒田1966：52-53）黒田によれば、これが「中央公論に反省の実のない例証として、7月号休刊のきっかけとなった」のである。（黒田1966：53）なお、1943年4月1日付の機構改革により第二課は出版課となり、海軍の古橋才次郎第二課長の後任として竹本が着任していた。（情報：256）竹本は、東京帝国大学法学部卒業後に内閣調

査局に就職し、4 月に辞任した奥村喜和男情報局次長に従っていた文官である。（奥村：61-67）戦後は、1963 年から 1983 年まで民社党の衆議院議員として活躍した。

黒田によれば、6 月 12 日に杉本と阿部と懇談した際、「自由主義というものはもともと外国の思想で、こんにちでは戦争遂行の大きなさまたげとなっている。これは、当然、払拭されなければならない。ところが、中央公論は依然としてこの伝統からぬけきっていない」と非難され、7 月号の執筆者は不適当であり、休刊してはどうかと提案された、とのことである。（黒田 1966：33）これを主に論じたのは阿部であり、阿部はさらに、「この程度のものしかできないというなら、もう中央公論なんかいりませんね」と言ったそうである。（黒田 1966：34）

黒田はさらに、「京都学派の論文に非難をくわえた報道部の阿部嘱託のことばと、情報局出版課主催の総合雑誌編集長とのこんだん会における下谷情報局嘱託の批判と、出版部員佐藤哲男君が日本出版会の書籍部長であった斎藤晌氏からきいてきたという意見とが、あたかも判でおしたように同一であった」と回想している。（黒田 1966：46）結局は、執筆者を入れ替えよとの要求である。黒田はまた、大日本言論報国会の幹部が『中央公論』不執筆同盟をむすんだとの情報を得て、常務理事・調査部長の野村重臣に真意を質しに行ったものの、「わたし個人の考えできまったものではない」と返答を拒否されたと記している。（黒田 1966：53）

『中央公論』誌面への当局による攻撃は高坂論文に限られたものではなく、毎号のように行なわれてきたものであった。高坂たち京都学派は、不適切な執筆者の一例であったわけである。しかし、阿部や斎藤、野村にとって、京都学派はすでに宿敵のような憎悪の対象であった。『中央公論』誌面の撲滅、あるいは争奪という事情も存在したとは推測されるものの、彼らの京都学派への攻撃は、より広く、知識人としての覇権争奪戦であったと理解されるのが適切であろう。

それでは『読書人』編集部は、どのような編集姿勢を示したのであろうか。編集部名の編集後記は、山本五十六の戦死、アッツ島の玉砕に言及し

たうえで、以下のように国内思想戦を高唱している。

「英霊に応へまつらんとする執筆諸先生並びに編集者の悲憤は凝ってここに哲学書批判号を成した。皇国の道に超然たるごとき印象を与へつつ、道を歪曲し、志気を阻喪せしむる論理が所謂哲学てふ名の下に行はれてゐるといふこと ―― これはまことに国のいのちにかかはる重大なる問題である。みたみの痛切のかなしみである。国のいのちを祈念するところから厳乎たる国内思想戦の道を貫かんとする已むに已まれぬ思想戦の展開なのである。本誌はここに思想の具体的発現たる「言葉」即「著書」を取上げ之が批判検討を致したのである。破砕すべきは徹底的に破砕せねばならぬ。ここに國體の本義は顕現するのである」。(読書人 3-7：82)

編集部の国内思想戦への熱意が伝わる一文である。本号はまず、房内幸成の「山本元帥のみ霊に捧げまつる歌」に始まる。続いては、佐藤通次「見るものから聴くものへ ―― 哲学の根本問題につき西田博士の教を乞ふ」である。佐藤は、「時代の厳粛な展開」によって、西田幾多郎「博士は、いま日本の思想を毒する源流としてその罪をすら問はれやうとしてゐる」とし、西田哲学は「いま海に陸に　陛下の万歳を雄哮びしながら護国の鬼と化しつつある国民の体験を論理化する力をもつものでない」と断じる。(3-7：2) 佐藤は、「その思索の原理、哲学の志気において不十分なる所がある」がゆえに「今日の不信」を招いたとし、西田哲学の根本的誤謬を問い糾すのである。(3-7：3)

佐藤によれば、「箇の見る働きを超箇の聴く体験によって包越し、その中に十全に働かしむる」ことが肝要であり、「絶対の超越的生命に」聴従して「随順・奉行」することが「哲学の第一原理であるべきである」。(3-7：4) しかし西田は自己の私見を優先し、「随順・奉行を道」とする日本の國體を把握できていない。(3-7：4) 西田は見ることや作ることを重視して、聴くことや生むことを体認できず、見ることを第一原理とするギリシアの哲学に帰って「皇国の道」を去ってしまった。(3-7：4-5) それゆえ西田哲学は、「国民の志気を阻喪せしむる」謬見なのである。(3-7：5)

「志気を阻喪」させるという文言は編集後記にも用いられており、京都学派への憎悪を構成する一つの要点である。それでは、志気を高めるものとは何か。栗田英彦は、佐藤が「哲学は所詮、言葉と行為を事後的に解釈」するものにすぎず、自己の哲学は「信仰告白」であると自認していたと指摘する。（栗田：485）佐藤にとっては、知的な探究ではなく信仰の体得こそが、哲学の課題であり本領なのであろう。志気を高めるのは信仰であり、日本国民の志気を高めるのは日本への信仰なのである。

このように、学んで知ることによって人間が賢さに至ろうとする知的な生き方を拒絶する心性は、現代風に言えば反知性主義と呼べるのではないだろうか。（植村 2020：75）この心性は佐藤に限らず、本号の執筆者たちに、さらには原理日本社の同人たちにも共通するものに思われる。三井甲之や蓑田胸喜たちは、原理日本の信への告白を必須とし、知的な探究を私見と断じて排斥しがちであった。解釈や独創ではなく信仰が重要なのであり、信仰に基づくがゆえに自己の勝利は絶対的である。蓑田が美濃部達吉の憲法学や西田の哲学を否定するのも、それらが私見にすぎず、日本の生命に有害な影響を与えると断定できるからなのである。（植村 2007：202-203、242-243、植村 2020：83）

ここで重要なのは、他者の信仰の有無を一方的に判断し、その判断を根拠に言論空間からの排除が正義とされる、ということである。これは原理日本社同人の年来の活動実態であり、その実績からすれば、原理日本社的な立場と総括することもできるであろう。あるいは、本稿の文脈で言えば、国内思想戦の立場となる。有害な言論が力を持つことのないよう、全力で、言論空間から排除する立場である。

佐藤は、「真の思想戦は国内においてこそ行はるべきものである」とし、「いはばそれは超箇の国の生命の自己反省であり、国の精神的苦痛である」とする。（3-7：7）矛盾を完全に解消して「自己同一的相対現成」の境地に到達するために、国内「総親和」のために争いを避けるのは誤りであり、「皇国の道を真に体得」して真理を内外に示せば「総親和」は実現する。（3-7：6-7）西田門下や和辻哲郎などが外国人の意向を気にするのは本末

転倒であり、われわれが真理を「実践的立場から」説いて外国人が理解すればそれで良い。(3-7：6) 真理は佐藤とともにあるのである。

佐藤の次は田中忠雄である。田中は、「文化類型学批判 —— 蛆たかる哲学的頭脳」と題して高山岩男を罵倒する。高山はこの頃、京都帝国大学文学部助教授である。田中は、「類型学が、国籍不明の公平さを以て、乃至はさういふ公平の仮面を附けて、登場せざるを得ないやうに構想されている」とし、「そこに魂がない」と断定する。(3-7：7-8)「究極の原理も精神も、畢竟して大和魂以外に求むべからざるものと覚悟せよ」と叱正する田中は、高山が、「神々より来れる大和魂を以て世界文化を見た」江戸期の国学者の達識を「主観的な偏見に擬するのは、国民の志気に水をさし、これを阻喪せしめる作用である」と弾劾するのである。(3-7：8-9)

田中は、「大和魂に出発せぬ議論理屈」は「のらりくらり」と突き詰めないものであり、弁証法論者の「哲学的頭脳には、蛆がたかってゐる」と罵倒する。(3-7：9) さらに、日本神話を西洋哲学風に理解するのは高坂正顕や西谷啓治も同様であるとし、国の古典に「けちを附けるとは、まことに言語道断」と決めつける。(3-7：10)「「神話」を否定するやうな哲学ならば、よろしく哲学を撲滅すべきである」。(3-7：12) こう断じる田中は、「宣戦の御詔書とは無関係に、西洋追随の「理念」を操って「総力戦の哲学」をあげつらふ有様は、まことに戦慄すべきものがある」と結論づけている。(3-7：12)

田中に続くのは、紀平正美の「「無」概念の弄び」である。これは、個人主義に基づく抽象的理論は「概念の弄び」にすぎないと否定して、西田幾多郎や田邊元を揶揄したものと推測される。(3-7：15) 紀平によれば、「畢竟は自己の生活様式、従って其れと連関しての日常の用語の規定、簡単に云へば歴史的に発展する日常の生活様式の規定を」学者は受けており、「それ以上のことを考へ出すことは出来ない」。(3-7：13) 紀平は、私的な理論の構成という「容易な仕事」ではなく、「一切の「私」を捨て去」って、日本の道をあたりまえに「ならす」ことが肝要であると説いている。(3-7：16)

紀平に続く三井甲之は、「「西田哲学」に就いて警戒すべき諸点」を指摘する。三井は、西田の言う科学的とは「弁証法的」であるにすぎず、その立場は「静観冥想」して「人間の思惟認識能力を買い被る」ものであるとする。(3-7：17) さらに三井は、蓑田胸喜の西田哲学批判への賛同を明言し、日本人の哲学は「日本國體を一切に先行する史実、永遠に開展する理念、一切の帰属する原理、教化の淵源、礼拝の対象」とする「臣道哲学」以外にないとする。(3-7：19) 以上4名の主張は、彼らそれぞれの年来の主張であり、その要求するのは、國體に随順しない京都学派の哲学を公的に排除し殲滅することなのである。

ここから後にも、ひたすらに弾劾は続く。文部省督学官の前田隆一は、下村寅太郎の著作『科学史の哲学』と『中央公論』掲載の「学問論としての科学論について」を併せて論じ、「我々が学問観の根柢に於てヨーロッパに屈服すべきことを強要する」主張と非難する。(3-7：21) 前田によれば、「人生の根源的なる信の根拠が絶対無窮の國體と歴史とに於て厳存してゐる我国」では、「我々が國體を護ることによって」科学も「摂取醇化」できるのであり、むしろ近代思想こそが科学の振興を妨げているのである。(3-7：23) 近代ヨーロッパの科学の精神を尊重せんとする下村は、それゆえ「國體と歴史」への信が不十分であると断罪されている。(3-7：24)

前田の立場は、文部省が1937年に刊行した『國體の本義』の立場であろう。これに対して下村は、「愚かな「日本的科学」」は「危険にして無責任な科学論」であり、科学の伝統を持たない日本では、西欧の科学への評価はなおさら適正に行なわれなければならないと確信していた。(下村：487) しかし、そのような主張は文部省の教学局で「「不健全」として非議」されたらしいと、下村は1988年に記している。(下村：487) 他方、岡本拓司は、当時の文部省内には「科学振興に向かっても思想上の問題は生じないと説得する」必要があり、「西洋の害毒から脱した日本科学」という主張がこれに有用であったと指摘している。(岡本：351)

いずれにせよ、前田の主張が文部省の立場からのものか、個人的な主張なのかは判然としない。文協や日本出版会のみならず、当時の文部省にも

知識人は勤務していたのであり、公私の主張の区別がつけがたいのである。

前田の次は浅野晃による西田幾多郎『日本文化の問題』への弾劾である。浅野は、第三高等学校時代には西田を尊敬したものの、一級上の斎藤晌による批判を聞き、左翼運動に入って訣別したと回想する。(3-7：24) その後、左翼運動と訣別した浅野は、天皇機関説と同様に、西田の哲学は「國體の信から発した学」ではなく、ここに根本的な誤謬があるとする。(3-7：26)「私を捨てて天つ日嗣を仰ぎ畏むものの学と、私のはからひを以て皇國體をみだりに疑議せんとするものとの違ひ」を浅野は決定的なものとするのである。(3-7：26)

『世界史的立場と日本』への弾劾者は、阿部仁三、吉田三郎、志村陸城である。阿部は、情勢判断よりも決意が肝要であると説き、「自分の見出した世界観」に「国民が信仰してついて行く」などと考える著者たちに疑問を呈する。(3-7：28) そのうえで、西谷啓治や高坂正顕の他の著作を論じ、日本に生きる「御高恩」や「世界史の意志を形成する御稜威」を理解していないと切り捨てている。(3-7：29)

吉田は、座談会が「西洋哲学の概念によって運ばれ」、読後には「第三者的批判」の印象が強く残るとする。(3-7：30-31)「皇国の伝統に生きる以外に、日本人が異民族に対する指導性を持つ道は見出し得ないと私は確信する」。(3-7：32) こう述べる吉田にとって、座談会の内容は中途半端であり、「もっと日本の伝統やアジアの伝統に透徹した考察を進められるべき」ものなのである。(3-7：32)

志村は、『中央公論』同年 3 月号掲載の高山岩男「総力戦と思想戦」と併せての論評である。「読書層」への座談会の大きな影響力を思って「我慢して」読んだと書く志村は、「何と面倒臭いものが学問なのであらうか」と嘆じている。(3-7：33-34) しかもそこには、宣戦の御詔勅を無視して戦争の意義を私議する「僭上」があり、彼らの思考法は「大詔、詔勅無視といふ懼るべき錯乱にまで」及んでいる。(3-7：36) これら「手品師の住処を奪ふのが内外を一貫する思想戦の急所である」と志村は断じている。(3-7：37)

特集に登場する 14 名の弾劾者のうち、残るのは 5 名である。森本忠は、「非国民教育論の一例 —— 木村素衛著「形成的自覚」」で、同書に教育勅語への言及がないと弾劾する。(3-7：38) さらに、世界史的国民を云々して「国民の外部より内部性格を規定し指導」せんとする「非国民的な教育指導方針」の提案であると決めつけ、木村の教育論が「一部確かに国民学校あたりにも適用されてゐるらしい」と危機感を煽り立てる。(3-7：40) 森本は、田中忠雄に寄稿を懇請されて困惑し、「教育論なら書けるだろ」と言われて「日本人の教育は教育勅語でやりゃいいんだから」と引き受けたと 1968 年刊行の回想に記している。(森本：169) そのような根拠で、森本は木村の教育論を「非国民的」と断じるわけである。

森本によれば、田中は「今日の日本の思想の根元悪は、西田哲学に在る。これを衝かなきゃいかん」と「張り切ってゐた」そうである。(森本：168) 森本はまた、『読書人』の「編集に三井甲之、蓑田胸喜氏らの原理日本社系統の若い者がゐた。田中君はそこの顧問か何かをしてゐたらしい」とも記している。(森本：168) 第 5 章末でも言及したように、田中は 1943 年前半の全号に寄稿しており、この頃の企画に継続的に深く関与していた可能性は高い。

森本の次は蓮田善明による「柳田謙十郎「歴史的形成の倫理」所見」である。蓮田は「この人々」と嫌悪感をもって語り、「全く夷心（からごころ） —— 亡国革命的な —— からの論議」には「一種の思想的幕府政治の心」があるとする。(3-7：42)「夷国人」の「断絶亡国革命の歴史（即ち擬歴史）」の「根元の思想に、唯その網の精巧さに盲従妄拝して、その涎をねぶりつつ皇国史を論題としてゐる」と憤激するのである。(3-7：42)「本皇戦の本義を攪乱する哲学者特有の妄言」をやめ、もっと徹底して、皇国の歴史を背負って語れというのが、蓮田の柳田に対する忠告であった。(3-7：42)

蓮田の次は豊川昇による西谷啓治『世界観と国家観』への弾劾である。豊川は、日本では「宗教も哲学も皆國體の用として働く」とし、宗教と哲学と国家の関係を論じるのは「日本では無用」と断言する。(3-7：43) さらに、日本の国家や神話を西洋のそれらと同列に扱い、「抽象的普遍に叩

頭するところの西洋的思惟」から離れえず、「「世界の日本」は口にしても、「日本の世界」を言ふことはできぬ」西谷を厳しく断罪する。(3-7：43-44) 会沢正志斎や吉田松陰のような「先人の志気を継承」しての学問を、豊川の求めているのである。(3-7：44)

豊川に続くのは、小沼洋夫による『中央公論』6月号への雑誌月評である。小沼は、「「中央公論」がその思想指導の立場を所謂京都哲学に求めてゐることは近来頓に顕著である」とし、「今日の思想問題は最早対象如何の問題ではなくて、考へ方如何の問題なのである」とする。(3-7：45) これは、第1章で紹介した保田與重郎の主張に通じるものであるように思われる。1941年9月刊行の『東京堂月報』第28巻第9号で、保田は、「何が書かれてゐるかよりも、如何に描かれてゐるか」を批評の対象とすべきであるとし、悪書追放に尽力するとの決意を表明していたのである。(東京堂月報28-9：4)

書かれていることではなく、書く人間の精神のあり方を糺すことは、他者の精神の善悪を一方的に判定する、ということである。小沼は、同号掲載の高坂正顕「思想戦の形而上的根拠」を取り上げ、その「事柄を殊更に分析し一般概念と形式論理を重んずる考へ方」は、「我が国民の持つ戦争に対する形而上的確信と体験による崇高性は、結局人類的なる普遍的真理の一つの特殊なる顕現に過ぎないものとして把握」されると指弾する。(3-7：46) 小沼によれば、「具体的問題を常に一般的な概念に基づく分析対立の相に於いて把握するといふ考へ方」は「左傾思想」のものである。(3-7：45)

ちなみに、上記の高坂論文は、中央公論社の黒田秀俊が多方面から責め立てられたいわくつきの論文である。なお、この小沼の批判にしても、文部省教学官からの批判なのか、『読書人』常連執筆者からの批判なのかは判然としない。

さらに小沼は、『中央公論』前年10月号掲載の高山岩男「歴史の推進力と道義的生命力」の「京都学派的偏向」に言及したうえで、「「中央公論」の編集者が思想指導の原理をそこに見出してゐるその考へ方を問ふ」とす

る。(3-7：46-47)「抽象的概念的説述を重んずる「中央公論」編集者の意図」が他の論文にも現われているとし、小沼は以下のように決めつける。(3-7：47)

「総じて本誌の編集者の意図は、常に国家の問題を観照的に傍観して個人的思惟に満足を与へることが問題解決の途であるかの如くに考へてゐることは明らかなやうである。執筆者の選定や論文に対する重点のおき方が自らそれを表はしてゐる」。(3-7：47)

こうして問題は、京都学派の考え方から『中央公論』編集者の考え方へと発展させられる。当号の編集長であった畑中繁雄は、高坂論文への当局の攻撃を警戒し、高坂宛に速達で文末の一文の削除を連絡するほどの注意をすでに払っていた。(花澤哲文：117) しかし、攻撃は文章から執筆者・編集者の「考へ方」に及び、次号の休刊につながっていくのである。

最後の下島連「嗤うふべき論文」も、高坂論文への弾劾であった。下島は、「自らの理性と称するさかしらに依って勝手な理屈を組み立てる」と高坂を問詰し、「皇国の大道に対する絶対の信」は偏狭でも固陋でもなく、その「恢復」が「思想戦の根本」であるとする。(3-7：48)『文藝春秋』の編集者である下島にとって、「形而上学等は速に禊祓ふべきもの」だったのである。(3-7：48)

以上 14 名の弾劾者は、編集者とともに京都学派への総攻撃を行なっている。初めての執筆者は前田のみである。原理日本社は三井、国民精神文化研究所関係者は紀平、佐藤、前田、阿部、吉田、『文藝日本』関係者は佐藤、田中、浅野、森本、下島、文部省は前田、小沼である。執筆者たちは他の雑誌にも頻繁に執筆し、互いの関係は複雑に入り組んでいる。しかし、京都学派攻撃で一致はしても、一団となって連帯しているというわけではない。競争相手を言論空間の外に押し出した後には、今度は自分が誰かに押し出されることを警戒しなければならない。やがて 1944 年の春には、『文藝日本』は存続に成功し、『原理日本』と『読書人』は廃刊を余儀なくされる。その詳細は不明であるものの、『読書人』が外に押し出される日は間もなくである。

第7章　1943年後半の『読書人』

1943年後半の『読書人』第3巻は、第7号を含めて総頁数平均75頁程度に減少している。第8号は通常の誌面構成に戻ったものの、本文はわずか34頁である。

編集後記の冒頭では、高橋利久が、「みやびの心を忘れ、こちたきあげつらひに、己が内に蔵すること貧しきを飾らんとする者は、国の一大事に際しても、戯論の回転に耽けるのみである」と記し、前号の反響を紹介している。(3-8：68)

「7月号は多大の反響があった。さる方より「7月号の反響は正に現代思想界の帰趨を示すものとさへ言へるでせう」とお手紙を戴いたが、まことにその通りであった。熱誠溢るる激励の投書言葉を多くいただいた。本特集の動機につき編集者の関知せず、又予想もしなかった様な、勝手なうがち過ぎた解釈を下してゐる向もある事も聴いた。その様な解釈に対しては弊誌の志向するところより当然為すべき事を為したまでであると答へるのみである」。(3-8：68)

高橋編集課係長の記す「解釈」とは何であろうか。改造社発行の『時局雑誌』第2巻第8号に佐藤通次は、「対内思想戦の反省」と題する一文を寄せている。発行は1943年8月である。ここで佐藤は、対内思想戦は現在、「京都の西田派哲学者及び和辻博士に向って集中」しており、これは「日本の精神界の健全なる事を示す」としている。(時局雑誌2-8：14) そのうえで、これが軽薄な流行となることは望まないとし、あわせて、京都学派への警告と哲学すべての排斥への懸念を表明している。

「また、現下の思想戦の果敢なる闘士の中に、嘗て左翼運動に多少の関はりがあった人がゐるために、今日攻撃を受ける側の人にしてあくまで無自覚な者が軍部又は政界の上層部に働きかけて、国内に無用の摩擦を起すものとして、政治的弾圧の手をさし伸べるが如き事態を生ずるならば、それこそ国家の一大不祥事であらう。また皇国の道を奉ずる熱烈な徒中に、哲学無用といふ如き極端な考を抱いて、一切の論理的思索を払拭せんとす

る者があるとすれば、一般知識人の生活地盤から浮き上ってしまひ、その虚に乗じて却って悪質の思想が時と処とを得てはびこるやうな結果になるであらう。まことに戒心すべきは思想の問題である」。(2-8：14)

つまり、哲学そのものが不要となれば、佐藤の「皇道哲学」も押し出されてしまうのである。その一方で、佐藤は改めて、「思想戦の現状の如き展開を変質せる左翼運動の如く曲解し、それを口実とする弾圧運動に呼応するが如きことなく」反省することを「彼らの側」に求めている。(2-8：14) 攻撃しているのは「なんら左翼的イデオロギーなどに関せざる」人々であり、「現下の思想粛正運動は何びとの策謀でもなく全く自然展開的のもので、連絡なきさまざまの方面がおのづから挙って動き出した」とし、最後にこう述べる。(2-8：14-15)

「此の度の思想粛正運動は断じて左翼運動の精神構造と一致するものではなく、またそれと関はりあるものでもない。余は京都派の方々及び和辻博士が、かかる解釈をもって自ら慰め、又はかかる解釈の下に国内総親和を楯に誹謗することなからん事を切に望むのである」。(2-8：15)

この「解釈」について、同年10月刊行の『読書人』第3巻第10号で、幡掛正浩が、「最近に於ける京都学派攻撃の傾向は巧妙に偽装せる左翼の戦術的謀略であるといふあられもないデマの放送せられてゐる現況」と記している。(3-10：22) 幡掛は田中忠雄に攻撃上の工夫を呼びかけており、治安維持法違反で1937年に逮捕され39年に出獄した田中が焦点であったようである。文学雑誌『リアル』を京都で発行していた田中たちの摘発は、『世界文化』『学生評論』『土曜日』といった雑誌関係者の摘発の初めであり、(奥平：218)「京都に於ける人民戦線的文化運動」と総称された事件の一環であった。(下川：2)

それでは、佐藤の言う「軍部又は政界の上層部」とは誰なのか。少なくとも、攻撃を受けた人々が海軍に働きかけたことはたしかである。東京帝国大学法学部教授の矢部貞治は日記に、1943年7月6日に「国内思想戦の一派の策謀及び京都大学派攻撃の真相」を大熊信行に聞き、10日には大熊、谷川徹三と会って「国内思想戦の混戦状態」を聞いたと記している。

（矢部：630-631）大熊は『読書人』の以前の寄稿者であり、谷川は西田門下の哲学者である。また全員、海軍の高木惣吉の協力者である。

矢部は7月25日に京都に到着し、26日には大熊から、高坂、西谷、高山、鈴木、柳田たちに「攻撃等の内情」の説明があったとも記している。（矢部：635）他方、高木惣吉の日記には、7月10日に西谷、高山、鈴木、27日に谷川、大熊の来訪が記されている。（高木：678、680）当時の高木は海軍少将であり、舞鶴鎮守府参謀長である。その後、藤岡泰周作製の年譜解説によれば、高木は「次官に問題をあげ、次官レベルで解決する」策を海軍省調査課員の扇一登中佐に助言している。（高木：991-992）8月13日の矢部日記には、この助言と関係すると思われる記述がある。

「午後海軍省に廻る。京都学派問題について、あまり放任もいかぬといふので、海軍の態度を決め、陸海軍の対立とならぬ程度で、京都学派の背後に海軍のあることを明らかにすることにし、下僚の方ではどんどん議論をさすことにした由。且扇中佐から局長、課長にも話し、海軍報道部とも協議し、文部大臣、情報局総裁、次長、司法省思想課長などに手当てをした由だが、情報局に出てゐる古橋中佐から、情報局の陸軍熊谷大佐といふのに懇々と話したところ、熊谷大佐が直ぐ杉本少佐を捉へて説諭し、杉本も反省と手加減を約したとの事だ。これらの経過を扇中佐から聞く。この旨一言安心せよと鈴木成高氏に手紙を出した」。（矢部：640）

ただし、それによって京都学派への攻撃が止まるわけではなかった。講談社発行の『現代』では、8月号に田中忠雄が「西田哲学的俗論」を書き、9月号では小沼洋夫が『読書人』の哲学書批判特集を「論壇の動向と指標」で絶賛していた。小沼は、その「論陣の趣旨は一貫して哲学上の機関説爆砕」であり、『中央公論』7月号の休刊は、「まさに機関説的思想論文の一斉退陣の貌を示した」と指摘している。（現代 24-9：27）また、佐藤の一文を掲載した『時局雑誌』には、森本忠、蓮田善明、阿部仁三の座談会「決戦下の思想問題」も掲載されており、京都学派への嘲罵が続いている。（時局雑誌 2-8：43、48）京都学派への攻撃は多方面から、自発的に行なわれ続けるのである。

さて、『読書人』第3巻第7号の巻頭は、房内幸成の「言霊の佐くる国」である。房内は、「現代人はみやびの心と伝統の感覚を失った」と憂慮し、「今の世に国語が乱れ力を失ったといふことがとりも直さず思想が乱れ、大和心が衰へたといふことである」とする。(3-8：5) しかし、思想戦とは言葉の戦いなのであり、それゆえ「インテリや世の思想家と称する人々の多くが「哲学」の迷宮」をさまよい、「国史、国語を軽んずる教育が支配的である限りは、思想戦の絶対優勢を確保することは難い」のである。(3-8：5)

房内によれば、西洋とは異なり、「よりて生くべき皇神の道」ある日本に哲学は「無用」であり、「有害無益」である。(3-8：5) 必要なのは「御製と古典の古道を慕ふみやびの歌心」なのであり、これがなければ日本では、「文学者、評論家、国史家、のみならずなべての学者、教育家、官吏、軍人、実務家」の「務めは果たされない」。(3-8：6) このように主張する房内からすれば、「みやびの歌心」なき人々は日本に有害無益となるはずである。

房内は、同年7月刊行の『文藝春秋』第21巻第7号に「天朝の御学風」を寄稿し、「何々哲学と自称する人々は私心に外ならぬその体系を整へるために、「日本的」を解釈するの不遜を敢てする」と憤っている。(文藝春秋 21-7：22) これは「言霊の佐くる国」とともに『天朝の御学風』に収録され、東京堂から1944年6月に刊行されている。

続いては浅野晃「維新史覚書」の第三回であり、歴代天皇の御製などからその思想を拝察している。その後、岡不可止による「市村咸人著『宗良親王』を読む」の紹介があり、雑誌月評の担当は教育学者の吉田昇である。なお、吉田の父は教育学者の吉田熊次である。吉田は『文学界』7月号の教育特集を論評し、今後はより深く、文壇人が教育に関心を寄せてほしいと願っている。(3-8：13) 穏当で適切な論評である。

新著月評では哲学思想がなく、科学も一人のみである。新規担当者は宗教の斎藤隆而、経済の難波田春夫、翻訳の平岩米吉、紀行随筆の谷信一、水原秋桜子、科学の石川光昭、児童読物の関野嘉雄、継続は現代文学の大

鹿卓、再担当が歴史の小林元、経済の土屋宗太郎である。いずれも前号の荒々しさと比べて意外なほどに穏当な書評であり、途中に大島伯鶴の講談本書評、岩井主藏のとりとめの無い読書記が挿入されている。

なお、興亜専門学校教授の斎藤は原理日本社同人であり、この頃は病気の蓑田に代わって『原理日本』の編集を担当していた。難波田は東京帝国大学経済学部助教授であり、大熊信行の論敵であった。難波田は「「家・郷土・国体」の三重の人倫関係とは直接関係しない経済統制や企業組織の改革」を二次的な問題とし、組織よりも人間を重視するとして、「財や労働の適切な配分」を重視する大熊の政治経済学と敵対していたのである。（牧野：154-155）これは、1年ほども経済分野の力強い書評を寄せてくれた大熊と、『読書人』誌が訣別したということなのであろうか。

第9号の巻頭は、松本彦次郎の「日本の文化史学」である。松本は三井甲之の長年の盟友である。続く房内幸成は、「順徳天皇」を刊行した今東光を高く評価し、（3-9：8）浅野晃の「維新史覚書」第4回を経て、雑誌月評の担当は下島連である。下島は「時局小説私感 —— 大衆雑誌8月号」で、「批判の尺度を厳密に保てば摘発すべき作品はまだまだ多い」とする。（3-9：13）下島によれば、「國體を護持し、その為めに全生命をかける」態度が作家に乏しいためである。（3-9：14）なお下島は、文末で山岡荘八と牧野吉晴を賞賛している。（3-9：15）

下島の次は田中忠雄の随筆「黒山鬼窟」である。『正法眼藏随聞記』を紹介しつつ、田中は、「即の哲学を鼻の先にぶらさげて」と揶揄を入れている。（3-9：16）新著月評は9名中5名が文学を担当する異例の編成である。文学以外では、科学の石川光昭、経済の土屋宗太郎、児童読物の関野嘉雄が継続、民族学の吉村幸純が新規である。日本出版会勤務の土屋は網羅的に新刊を紹介しており、概観に便利である。また、目次では奥村鐵男の「最近刊行のタイ国関係書一二に就いて」も新著月評欄に入れられている。

文学では、まず中谷孝雄が佐藤春夫の『環境』と房内幸成の『民族の慟哭』を絶賛している。続いて池田勉が『国語の尊厳』を取り上げ、漢字制

限案や仮名遣い制限案と戦う人たちが日本国語会を結成し、本書を刊行したと賞賛する。(3-9：21) 池田は、本書には「国の道の声」があり、それは「草莽の志」、「神風連の精神にも現れた純潔な神州の志気」から出た精神の「立言」であるとする。(3-9：21-22) ちなみに、「国語変革実施強行に反対する「建白書」を起草」し、(神社新報社：418) 森本忠とともに日本国語会設立に尽力したのは、島田春雄であった。(森本：73、81) なお、池田は、蓮田善明が編集する『文藝文化』の同人である。

続く那須辰造は再担当であり、貴重な『世阿弥自筆伝書集』を紹介している。その後、志村陸城が保田與重郎『皇臣伝』の「深い洞察」を高く評価し、(3-9：24) 檀一雄が、「万葉集を歴史の書として読んだらいい」という保田與重郎の提言を「いかなる大学教授からも、また歌よみからも聞かなかった」と絶賛している。(3-9：26) 文学欄で絶賛されている人たちは、『読書人』の執筆者か関係者である。

本号の編集後記には、用紙節減のため新刊分類目録の内容大意の廃止が告知されており、あわせて、編集部員の渡邊保夫が 7 月 28 日に急逝した旨が知らされている。(3-9：55)「病を押して 7 月号の編集を終って間もなくだった」とのことである。(3-9：55)

第 10 号は、座談会「文学を語る —— 佐藤春夫氏を囲みて」が冒頭にあり、佐藤春夫、浅野晃、大鹿卓、田中忠雄、檀一雄、中谷孝雄、秦一郎が参加している。引用符「　」の使用は文章として好ましくないとか、講談と浪花節のどちらに将来があるかなど、弛緩した印象の会話が続いている。(3-10：3、10) 秦一郎はフランス文学者である。

その後、浅野晃「維新史覚書」の第 5 回、石田外茂一と渡邊水巴の穏やかな随筆を経て、雑誌月評は幡掛正浩である。「渦紋を辿る —— 綜合雑誌寸評」で幡掛は、『公論』誌上の偽史文献論争を取り上げ、島田春雄の尽力を称えている。(3-10：20) これは、竹内文献などに基づく空想的な國體論への反論であり、森本忠も島田の努力を高く評価していた。(森本：161-162)

幡掛は次に京都学派の問題を取り上げ、蓑田胸喜たちの「長年月にわた

る倦まざる努力」を称えつつ、一切の反対対立を許さない一方的な姿勢に不満を示す。(3-10：21) 幡掛は、蓑田たちの批判を代表的とせず、国民的自覚から京都学派哲学の「傍観的性格」に反発した『読書人』と『現代』の編集方針の方を高く評価する。(3-10：21) 幡掛によれば、『読書人』では2月号の座談会「日本的思惟を語る」に「予告編」の感があり、「果せるかな爾来同誌は濃度の差こそあれ毎号一貫して反京都派的意識をもって編集され、知識人の関心を急速に牽引してきた」のである。(3-10：21)

幡掛は、『世界史的立場と日本』が3月末に刊行され、大きな反響を呼ぶに至って、「果然同誌は論壇の反京都派を総動員し、「哲学書批判」の特集を以て熾烈なる痛撃を加へるに至った」とし、以下のように『読書人』を賞賛する。(3-10：21)

「従来西田氏流の哲学的思惟にあきたらず夫々の立場から種々と批判が加へられてきたことはあったにしても、かくも大規模に堂々と正面きって攻撃の筆陣が張られたことは全く空前のことに属し、この「読書人」の放胆なる壮挙には流石の知識人も驚倒せしめられた感があった。所謂京都学派問題が抜き差しならぬ瀬戸際の問題として何うかの結着を要請せられるに至ったことはこの特集号の果した殊勲であり且責任であると考へる」。(3-10：21)

幡掛は、これに比べて『現代』の編集方針は消極的であり、『文藝春秋』『公論』『国民評論』の取り組みは弱いとする。(3-10：21) 執筆者では、西田哲学に「見劣りのせぬ独特の体系を構築」した佐藤通次と、破邪へと痛烈に進む田中忠雄に注目しつつも、田中の「論陣の張り方」に工夫が必要ではないかと指摘する。(3-10：21-22) 第6章に言及した「デマ」も含めて、田中の「痛語は一面反感をそそる逆作用を呈してさへ居る」からである。(3-10：22)

幡掛は、『国民評論』で吉村貞司、『文藝春秋』で島田春雄が和辻哲郎を批判したことを紹介し、「京都派諸氏の思惟方向とその政治的動向は厳重に看視せられねばなるまい」との決意を表明している。(3-10：22) 神職

の家の出身である幡掛は、京都帝国大学文学部哲学科で宗教学を学び、（幡掛：304）葦津珍彦は義兄にして同志であった。（神社新報社：365）葦津は戦争の実情を踏まえて東條英機政権を批判し、「独立の最後の一線を守るため」の戦争という線での情報宣伝を考えて行動していた。（葦津：50）米英への宣戦の詔書にある「自存自衛ノ為」の戦争という位置付けを積極的に打ち出すべきとの判断である。

幡掛は葦津とともに活動し、終戦時には秘書として迫水久常内閣書記官長を支えている。（神社新報社：365）なお幡掛によれば、終戦時の和平判断のため葦津とは「約六年間、義絶状態」であった。（幡掛：356）葦津がなお、「屈辱降伏」ではなく「名誉ある降伏」を目指す判断であったためである。（葦津：64、葦津・西田・西澤：507-508）いずれにせよ、東條英機政権を厳しく批判し、その戦争指導や情報宣伝にきわめて批判的であった葦津や幡掛からすれば、世界史的立場という線での京都学派の主張は、あまりにも楽観的な空論だったのであろう。実情を踏まえない空論としては、たしかに、政府の主張とさして変わらないものである。

なお、雑誌月評の余白には雑誌摘録欄があり、『原理日本』で斎藤隆而が高坂の『日本諸学』誌上の論文を「形而上的戯論」と批判し、『国民評論』では蓮田善明が文学不要論に反対したと記している。（3-10：22）国内思想戦はあちこちで継続中である。

続く新著月評では、保田與重郎が文学を初めて担当している。文学の小島吉雄と山岡荘八、科学の杉靖三郎、児童読物の佐伯郁郎も新規であり、歴史の森末義彰と教育の阿部仁三は再担当である。以前に政治を担当した阿部隆一が今回は思想を担当している。同じく思想を担当する佐藤通次も新規である。

保田は曽良の『奥細道随行日記』を紹介している。保田は本書で、「歌枕を求め、社寺に上代皇室文化の遺跡をさぐることが、風雅の道を生きる文人の生活の信条だった」という自己年来の主張に実証が伴ったことを喜んでいる。（3-10：23）味わい深い一文である。国文学者の小島吉雄は『万葉集大辞典』の学術的価値を力説し、小説家の山岡荘八は戦記文学の

不振を指摘したうえで、尾崎士郎の『烽煙』を例外的に評価している。(3-10：28) 尾崎は『文藝日本』の主要同人である。

杉は、「翻訳乃至翻訳的科学書」が科学への理解を深めていないとし、現在、「「人類・世界」を「民族・国家」よりも高しとするユダヤ的普遍妥当主義」が自然科学分野に入り込み、「唯物的機械主義、自我功利主義、瑣末主義、事大主義などの温床」になりつつあると警告する。(3-10：29) 「科学は必ず思想によって裏づけられてゐる」とする杉は、科学の思想を思想戦において特別に重視するのである。(3-10：30)

杉は国民精神文化研究所所員であり、前文部大臣の橋田邦彦門下の生理学者である。赤澤史朗は、杉が 1944 年に、食糧への不安は「米英ユダヤの飽食的栄養学」による「出鱈目」と批判したことを紹介している。(赤澤：60-61) 杉について岡本拓司は、恩師の橋田では「精神性の重視という段階に留まっていた日本精神への言及を、宗教的な存在としての天皇への忠誠心を強調する形態に変化させた」一例としている。(岡本：424)

教育では阿部仁三が、「教育と錬成」の関係を論じている。阿部は、「学校教育本位の教育体制を改正」して教育をより広義なものに、かつ「国民教育」を真に行なうものに変えることが今日の改革の課題であるとしている。(3-10：34) 思想では佐藤通次が、磯部忠正の『神話哲学』を高く評価する。「神話はある一派の哲学者の考へるやうな、単に徹底的にロゴスや哲学によって否定される出発点や素材的なものたるに止まらず、却って哲学の原動力となり、また哲学の究極がそれにかへり行くところの生の原型」とするからである。(3-10：35)

佐藤は、神話哲学を成立可能とするのは日本神話のみであり、それゆえ日本神話哲学とわざわざ日本を冠する必要はないという磯部の主張に賛同する。そのうえで、「日本とか皇国とかの語を学の上に冠することを斥ける和辻博士とは全く反対の立場」からの「皇国学徒の見識」と称讃するのである。(3-10：36) なお、磯部は同書の序文で、恩師の紀平正美への感謝と佐藤、斎藤晌、田中忠雄など先輩たちへの謝辞を記している。(磯部：序 4) 磯部は当時、学習院教授である。

佐藤はさらに、この機会を借りて一言したいとし、「皇道といへば哲学は不要」とはならないと力説している。(3-10：36) 自己の皇道哲学は「皇道を西洋流の哲学で基礎づけるといふ如きものではなく、哲学において皇道を開顕する」ものであり、磯部の考えとも合致していると力説するのである。(3-10：36) しかし、ギリシアやヨーロッパとは異なる日本の哲学を明らかにするにしても、それなら哲学という呼び名にこだわる必要はないのではないかという反論も、不当ではないように思われる。

思想を担当するもう一人は、原理日本社の阿部隆一である。阿部は、中庸を論じた学術書2冊を紹介する。その際、「わけのわからぬ徒輩を哲学の神様と思ってゐる現代の日本の哲学界」を批判し、西晋一郎こそは「真の思想家」であり、その著作は「時と共に光を」増すと絶賛する。(3-10：37)「現在流行の哲学書は何年か後には」紙魚の餌になるとのことである。(3-10：37) 阿部は当時、慶應義塾大学文学部助手である。

児童読物の佐伯郁郎は、浅野晃の『少年太閤記 —— 天の巻』にある程度の評価を与え、(3-10：40) 歴史の森末義彰は、小林元が『歴史眼』で主張する「皇國體的生」を小林の「皇国史観」と高く評価する。(3-10：42) 最後に、岩井主藏の読書記が今号もまだ続いている。

編集後記では高橋利久が、大日本言論報国会が9月17日に公表した「みづからの内なる米英的思惟を攘ひ」、「国内に残存する自由主義的観念と、これに淵源する一切の反國體言動を徹底的に禊祓」するとの決意表明に賛同している。(3-10：63) 赤澤史朗は、イタリアが9月初めに無条件降伏し、政府が21日に国内態勢強化方策を発表するこの時期、「国民思想の分裂と動揺」に危機感を募らせて、大日本言論報国会が国内思想戦に強く踏み込んだと指摘している。(赤澤：73-76)

高橋はここで、杉靖三郎に科学分野を長期担当してもらう意向を示したものの、(3-10：63) 杉は今回限りとなった。科学担当は第4巻第3号まで不在であり、本年前半までのおおむね3名の担当と比べると、実に落日の感がある。なお、房内幸成が「前田隆一君の南方へゆくを送る」と題した歌を掲載している。(3-10：40) 前田は海軍司政官としての赴任である。

科学分野の担当者が確保できなくなったのかもしれない。

第 11 号の特集は「史観を正す」である。橋田邦彦の後任である岡部長景文部大臣が正史編修を提案し、8 月 27 日に事業実施の閣議決定が行なわれていた。(長谷川：262-263) 長谷川亮一は、「主として日本浪漫派系の執筆者たち」による『読書人』の反対論調について、彼らの「文部省とアカデミズムの歴史家」への不信感を指摘している。(長谷川：267-268) ただし、批判者たちは多様な思想的背景を持っており、彼らの立場をどう呼ぶかは難しい問題である。

それでは、どのような主張が本号で展開されたのであろうか。特集の冒頭は房内幸成である。房内は「正史撰修の故実」を辿り、発議は天皇からあり、「断じて臣民の側」からではなかったと指摘する。(3-11：4) そこに撰修の精神が現われるからである。そのうえで、約 1160 年の国史を 15 年で編修するのは「短きに過ぎはしないか」と疑問を呈する。(3-11：5) さらに、幕府中心の国史観、新井白石の幕府史観、あるいは「西洋史観や西来の文化主義の史観」の歴史家が撰修に参加したりすれば、「まことにゆゆしき一大事」であるとの懸念を表明している。(3-11：6-7)

これに続いて「日本正史の編修」を論じるのは、保田與重郎である。保田は、「我々文学者の見地よりみれば」朝鮮総督府の小学校用歴史教科書も文部省の国民学校用歴史教科書も、文章も内容も低調であると批判する。(3-11：8) 文部省に不信感を抱く保田は、文部省が「「皇国史観」といふ意を、単に「臣民の道」風の教本思想で考へるなら、ここに大なる誤りが起る」との釘も刺している。(3-11：10) そもそもの「文部省の明治以降の思想の状態」からしても、「都下新聞紙」の報道や社説を見ても、正史の意義が理解されず、あるいは曲解されるのではないか、というのが保田の深刻な懸念なのである。(3-11：9)

保田からすれば、「神皇正統記以来の日本の国史感覚を、不公正の偏った態度の如くに考へる」弊風は、「民間の異学私学として現れるまへに、文部省の初めより、文明開化的修養の陋習として伝ってゐた」ものである。(3-11：11) それゆえ、正史を「皇国史を客観視する国際的な史観と考へ

るものが、巷間の言論界に一般であること」になったとして、おそらくは京都学派の人々や偽史文献の支持者を念頭に、以下のような批判を記している。(3-11：11)

「聖戦の目的を、世界史的使命によって説くといふ思想が、大東亜戦争以来我が言論界を風靡し、あるひはその世界史的使命を、荒唐無稽な考古学的太古史の復興と云ひ、あるひは戦争遂行の情勢が低下すれば、これを道義精神といふ国際的な抽象概念で説かうとする。聖戦が、まさしく神意奉行の聖戦なれば、四隣庶衆は自らこれに服するにいたるのであって、この精神を非日本的な国際概念で説く如きは何ら必要ないのである」。(3-11：11)

保田は、「國體明徴はすでに完成したと云ひ、今日の要務は時務論にありとする今日の革新的思想傾向」の存在を指摘し、この傾向の人々が「所謂客観的歴史をひそかに考へる者に結び」ついて、正史の名で「尊王攘夷の大道に立脚する国史精神を歪定」せんとしていると警鐘を鳴らす。(3-11：12-13) たとえ論者に「謀略」がなくとも、共栄圏建設などの時務を優先する「論法」は、「尊攘奉行の大道を抹殺する側に加担する結果となる」とするのである。(3-11：13)

それゆえ保田は、国内思想戦の必要性を改めて主張する。それは「相手を賊とみて」戦うのではなく、今日では「便乗的なゆきすぎ」を正すものであり、世界史的使命や皇国史観といった「最高級のことばが、情勢論的革新論法によって、どのやうに変歪されるか」に深く思い致すものなのである。(3-11：13)

続く浅野晃は、大久保利謙の『日本の大学』が明治天皇や歴代天皇の「叡慮」を看過し、それゆえ明治維新の精神を理解していないと弾劾する。(3-11：15) 浅野によれば、大久保の史観は「人民史観」であり、「結局人民主権論」であって、「嘗て左翼に走った」自分はその危険性を痛感するとする。(3-11：15) 浅野は、昭和初期に日本共産党中央委員候補であった。(浅野・影山：187) 浅野によれば、『読書人』に維新史覚書を連載するのは、このような史観を正すためなのである。(3-11：17) なお、大久

保の本書は文部省推薦図書になっており、本号に短い内容紹介がある。(3-11：27)

さらに続くのは、藤田徳太郎の「ある維新史観」である。藤田は、「國體の確信の上に立って、国民の志を生かすべき歴史」を求め、(3-11：18) 小説家の長谷川伸による『相楽総三とその同志』を学術書よりも高く評価している。(3-11：21)

今号は新著月評欄がなく、本文45頁のほぼ全てが特集である。文化摘録欄には国史編修準備委員会の説明と委員名が掲載され、(3-11：45) 雑誌摘録欄には、『理想日本』10月号で幡掛が和辻を批判し、『経国』10月号で藤田がイタリアの禍根は自由主義容認にあったと指摘し、『知性』10月号で豊川昇が哲学とは「みくにまなび」であるとしたことが紹介されている。(3-11：21)

藤田と雑誌摘録の小欄の次は、荒木精之の「神風連に対する史家の謬見を正す」である。荒木は、文部省維新史料編纂会による『維新史』の記述の杜撰さを指摘し、神慮による戦いを理解できないのであれば「天祖の神勅の絶対なる所以もわからない」と痛論する。(3-11：23-24)熊本で日本談義社を主宰する荒木について、1942年に『神風連のこころ』を国民評論社から刊行した森本忠は、「荒木氏に導かれて神風連に興味」を持ったと回想している。(森本：132) 荒木も森本も熊本県出身である。

その森本は、荒木に続いて「史観を正す」を書き、「現に官行の歴史にして、遺憾ながらその史観に国民の疑惑をあつめるやうな性質のものが存在する」と指摘する。(3-11：25) 森本はその一例として荒木と同じく『維新史』を挙げ、孝明天皇や尊王攘夷論の軽視を批判するのである。(3-11：25-26) これに対して、森本が高く評価するのは、専門家ではない志村陸城であり、史学者には「國體への絶対信」が欠けているとの不信感を表明する。(3-11：27) 森本は、1942年前半まで新著月評の歴史分野を『読書人』で担当した秋山謙造に対しても、創造や建設など「西田哲学一派の世界史の観念に結び付かないものでもない」と敵意をあらわにしている。(3-11：27)

大崎勝澄による「大国隆正の国学」再評価の呼びかけを経て、その次は原理日本社の斎藤隆而である。「近代史観の二潮流」と題して、斎藤は松本彦次郎の「コトノハノミチのシキシマノミチの史観」を絶賛し、中村直勝の「合理的論理主義的史観」と対置している。(3-11：32) さらに、蓮田善明の「『のりと』としての皇国文学史」が続き、風巻景次郎や池田亀鑑の国文学史研究への不満が記される。(3-11：36-37) 文学史は「いのり」であり「のりと」であり、知性による構成であるべきではないとするからである。(3-11：38)

この後には、勤王の志士である有馬新七の京日記の一節が編集部により紹介されている。大名と家臣の進むべき道を「皇国史観の眼目」より説いたものであり、「古今の沿革」と名づけるとしている。(3-11：39) これに続く高橋峻の「古事記と歴史観」、難波田春夫の「日本資本主義の研究について」は、軽妙に書かれた随筆である。

しかし、高橋利久名の編集後記は重く書かれている。「正すべきを正さずしてかりそめに成った総神話の脆さ」はイタリアのように危急時に顕われるとし、国内思想戦への反対論には「厳密なる批判検討が為さるべき」と主張するのである。(3-11：44)『読書人』編集部としては、断固として国内思想戦を敢行するとの重ねての意思表示であろう。すごみを利かせるような口調である。本文の最後には、房内を撰者として7名の歌が掲載されている。社内の結社であろうか、石井良介も歌を寄せている。(3-11：45)

第12号の特集は座談会「文化史観を語る」である。参加者は牧野吉晴、浅野晃、田中忠雄、谷信一、小高根太郎、大口理夫であり、文化史や美術を論じる会であった。その冒頭で牧野が歴史教科書批判を始め、たしかに逆賊への憤りがないと田中が話しを引き取っている。(3-12：1-2) その後、記者が西田直二郎への疑念を表明し、田中が村岡典嗣とともに不適切として、まずは「発展史観を匡さなければならん」と宣言する。(3-12：3) 牧野は、文学では自由主義が「爆砕しても爆砕しても根を張って」くるとし、音楽美術でも警戒すべきと説き、田中も同調する。(3-12：5) 美術に思想

を求めるのは「西洋的な考へ方」ではないかと穏やかに反論する谷に対して、牧野は、「これだけが旧態依然では、ひょっとすると、此処に敵の謀略が働きはしないか」とまで詰め寄っている。(3-12：6)

田中もまた、「この作品はバドリオと通謀する恐れありやなしやといふやうなことが解らぬやうでは情ない」とし、そんなことでは「美術というふものの非常な堕落だ」と決めつける。(3-12：6) ピエトロ・バドリオはイタリア降伏時の首相であり、日本のバドリオが誰なのかは、国内思想戦でも権力闘争でも重要な争点となっていく。それはつまり、降伏の懸念を抱くほどの戦況である、ということであろう。

牧野はこの後も、「この苛烈な文化戦争をしてる」時にと憤ったり、「日本画の批評家達が洵にウンコの如きやつだった」と言ってみたりする。(3-12：7) その合間に、東京帝国大学教授で美学・美術史研究の児島喜久雄が標的となり、小高根太郎はその精神を「フランス的な精神」と呼び、田中は「児島喜久雄また白樺美学、或ひは京都派の連中の考へ方」は眺めるのみと批判する。(3-12：7-8) 小高根は富岡鉄斎研究者であり、東京帝国大学文学部美術史科を卒業して、この頃は国民精神文化研究所調査嘱託であった。

牧野はさらに、「資本主義と手を握った」日本画家や美術評論家を非難し、「文展は資本主義の社交場」と弾劾し、富岡鉄斎は違うとの小高根の反論を遮って、「おっさんがゐただけでは問題にならん」と切り捨てる。(3-12：9-10) 牧野は谷や小高根に、自分たちのように「自由主義的な見解にある人達」を斬ることに奮起せよと迫るのである。(3-12：9)

日本美術史家の谷は、東京帝国大学文学部美術史学科を卒業し、当時は京城帝国大学助教授である。東京堂からは 1942 年に『室町時代美術史論』を刊行し、1943 年 7 月から刊行の『世界美術図譜　日本編』全 12 集の編纂にあたっていた。この図譜は日本編西洋編各 12 集から成り、東京堂として特別に力のこもった出版企画である。『東京堂の 85 年』には、増山新一出版部長が谷と今泉篤男に提案し、大橋勇夫専務も尽力して大成功を収め、「他の単行本を一冊も出さないでも、出版部の経費は十分賄えた」と

記されている。（東京堂：412-415）西洋編の編纂は今泉、監修は児島喜久雄である。

しかしなぜ、看板企画の監修者が座談会で標的となるのか。出版部の意向と編集者の意向が違うのか、東京堂が座談会参加者たちに逆らえないのか、詳細は不明である。

座談会に続いて、房内幸成の「修史と君臣の大義」である。房内は、西田哲学や天皇機関説が國體に反して誤りであると断定し、國體の本義が語義漠然として流行する現在、文部省が改めて「君臣の大義を明徴にする」責任は重いとする。（3-12：16）房内は、「冷然と国史を眺めつつ論ずる者はすべてえびすである」として「リアリズムのえびすごころ」を排撃する一方、「古道は殊に古事記や万葉集以下の御製を中心とする敷島の道に、歌ひつがれてゐる」と指摘する。（3-12：16-17）房内からすれば、国史とは「一すぢの古道」であり、「敷島の道即ち国史」なのであって、この道を承けて「大和言葉を頂き畏む心なき者」は修史の歴史家として失格なのである。（3-12：17）

続く雑誌月評は、幡掛正浩の「硬論の振起を望む —— 綜合雑誌十一月号概評」である。幡掛は、国内思想戦は「国内の総親和を害す」との批判を厳しく斥け、「有司専制への端を開く」ことのないよう硬論を振起すべきであると説く。（3-12：18）幡掛は、『現代』の蓮田、『公論』の森本と保田、三浦義一、『文藝春秋』の房内と田中を高く評価している。（3-12：19-20）

幡掛は、総親和論は「官辺よりする放送」であり、「ややともすれば億兆一心を紊るものが、事実に於て　天皇の大御手代（おおみてしろ）たる有司の側にあるとの真相」があると断言し、「必無の仮定ではあるが —— 若し要路の戦争指導層、その名もなき一員にしてもが戦局の前途についていささかの悲音をあげたり」すれば、国民への影響は自由主義などよりもはるかに深甚であると思想戦「翼賛」者は思い致すべきである、とする。（3-12：19-20）東條英機政権と対立して取り調べを受けて間もない幡掛の言をどのように読み解くかべきは、当時の反東條運動の複雑さもあって、筆者には判断でき

ない。ただ、これほど率直な政治的発言は、『読書人』誌上に初めてではないかと思われる。

月評とは別に雑誌摘録の小欄があり、『時局日本』11 月号に佐藤、『文藝世紀』11 月号に保田の文があると紹介されている。(3-12：20) 編集部の筆であろう。前号になかった新著月評が復活しており、今号は 7 名が担当している。新規は歴史の志村陸城、社会の橋野登、再担当は思想の池田勉、哲学の豊川昇、継続は文学の小島吉雄、山岡荘八、児童読物の佐伯郁郎である。

志村によれば、歴史にとって重要なのは事実でも解釈でもなく、「一貫せる意志」であり「事実の底に流るる生命」である。(3-12：21-23) 志村は、白柳秀湖の『民族日本歴史』にはそれがないとする。9 月号で文学を担当した池田は、今号では思想を担当し、7 月に創元社から刊行された『近代の超克』を論評している。池田は、河上徹太郎が結語で述べる「開戦一年の間の知的戦慄」とは「恐らく西欧知性と称する夷心になほ恋々たる而も小心保身の戦慄」だったのであろうと批判する。(3-12：25) 亀井勝一郎は聖戦を、西谷啓治は皇国を理解できず、鈴木成高はヨーロッパ理解を求める発言をしてしまい、結局は「近代の跳梁」に終わっているとするのである。(3-12：26-27)

豊川は、紀平正美の『建国の哲学』を絶賛している。これは、満洲国建国十周年に際して建国大学研究院から依頼されたものとのことである。(3-12：28) 山岡荘八は「無窮のいのち」に連なる戦記文学を絶賛し、「生命の燃焼」を重視している。(3-12：30) 小島は国文学、佐伯は童話の近刊書を紹介し、橋野は労務管理の国民的重要性と企業一家体制の必要性を説いている。(3-12：33-36)

他には富澤襄による善波周『弾倉』への好意的書評、宮下良による「草莽書評」が頁下部にある。宮下は、田中、蓮田、保田を高く評価し、房内を皇国史家として専門家の平泉澄よりも高く評価する。平泉が『天兵に敵なし』で「漢学系統」に重点を置きすぎる、とするからである。(3-12：62)

1943 年の東京堂では、「応召、徴用によって社員の数」は減り、「小売部外売課は人員の不足と、荷造資材の入手困難により、この年 6 月 30 日限り、閉鎖」していた。（東京堂：416）他方、日本出版配給株式会社では、『新刊弘報』を 6 月に創刊し、新刊予定書の内容紹介を掲載していく。（荘司・清水：33）これは書籍の売切買切制実施と連動した対応であり、予約のための機関誌創刊を日本出版会との連署で、内務大臣宛に 3 月 31 日に申請していたものである。（荘司・清水：30-31、231）

新刊書情報が『新刊弘報』に掲載されるのであれば、『読書人』各号の後半を占める目録の価値は減じたことであろう。ただし、当初は 3 万部、後にも 6 万部しか弘報を発行できず、「書店を中心に図書館、公共機関重点に頒布」するに留まったとのことであり、（荘司・清水：34）『読書人』の一般読者向けの価値は残ったと思われる。しかし、雑誌の先行きを考えれば、何か特色を打ち出すことが切迫した必要になっていたことであろう。7 月号の特集「哲学書批判」は、出版業界のこのような事情もあっての企画なのかもしれない。

1943 年後半の『読書人』は、「悪書」を弾劾し、信念を重視する方向を固めるものであった。ただし、京都学派攻撃への反発があったためか、名指しの攻撃は 8 号以降で少なめである。誌面構成では、7 号と 11 号が新著月評欄を省略して異例であり、11 号の特集では文部省の見識を問い糾す雰囲気がある。分野的には、科学が激減して文学が主流となり、その執筆者たちは互いを賞賛しつつ、歴史学や美術史などに注文を付けている。幡掛の政治的発言には特に迫力があるものの、これはあくまでも例外的なものである。

「編集室から」では、高橋利久係長の応召を石井良介が報告している。（3-12：58）東京堂全体にしても編集部にしても、弱体化してきていることは、たしかである。

第8章　1944年前半の『読書人』

1944年後半の『読書人』第4巻は4号限りである。総頁数はほぼ72頁を維持している。第1号の冒頭は山田孝雄である。山田は「皇国の歴史を如何に観ずべきか」で、皇国の歴史は「國體即ち大日本皇国の本質に基」づき、盛衰はあっても滅亡はない。(4-1：2) 外国の歴史は手本にならず、「我が国史は日本精神の展開の記録」であると1943年10月29日付で穏やかに説いている。(4-1：7)

神宮皇学館長の山田は同月2日に国史編修準備委員会委員に就任し、1945年8月に国史編修院長に就任することとなる。(長谷川：273、289) 編集後記には、「特集「史観を正す」にこめた我らの念願を御読み取り願ひたいと思ふ」と記されており、(4-1：62) これで一応、声が届いたということになるのであろうか。

続いては三井甲之の「孝明天皇御製に就いて」である。明治天皇の追慕から孝明天皇の御製拝誦に移り、拝誦によって「叡慮をしのびまつり臣民の心によびめさめしめらるる承詔必謹の謙抑臣道感覚奉公忠節情意を表現せむと心がくべきである」としている。(4-1：9) 編集後記では、三井を「言の葉の道の達人と言はれる方」としている。(4-1：62)

この後は、浅野晃の連載第6回、訓導として教育現場に立つ江藤迫の皇国教育論、(4-1：18) 秦一郎の「鷗外断片」となる。雑誌月評は、牧野吉晴の「大衆国民雑誌概評」である。牧野は、諸誌の内容はおおむね低調で「無定見な国策便乗」であると切り捨てる。(4-1：22) 具体的には、『富士』の尾崎士郎と山岡荘八、編集方針では『講談倶楽部』を評価する一方、『日の出』掲載の江戸川乱歩の科学小説「偉大なる夢」を以下のように酷評している。(4-1：23-24)

「少くとも第1回を見て感じたことは、斯の如き科学的合理主義が、決戦下に於ける国民感情に、神助のおそれおののきと有難さを亡失させんとする結果とならば、由々しきことに思ふ。日本國體の神聖によって戦ひはおし進めらるべきで、科学的数理観念で、割切ってはならない。かかる迷

盲は必然に、敵国アメリカの戦争観念に通じて行くことを承知すべきである」。(4-1：23)

続く新著月評は6人が担当している。新規は文学の後藤積、美術の金森遵、再担当は哲学の斎藤隆而、継続は国文学の小島吉雄、文学の山岡荘八、産業の橋野登である。斎藤は以前には宗教を担当した。産業は社会からの分野名改称であろう。

小島は国語学の学術書の価値を力説し、(4-1：26) 後藤は正岡子規の精神を追慕する。(4-1：29) 山岡は戦記文学を論評し、橋野は「企業の唯物的・個人主義的・分裂的状態」への批判と「労資一体企業一家の皇国企業体制」の要求を行っている。(4-1：31) 斎藤は「里見岸雄氏の概念論的皇道論」を批判し、皇道王道の論じ方が「概念戯論的」であるとする。(4-1：34) 憲法学者の里見は石原莞爾の盟友であり、田中智学は父である。金森の美術欄は、近刊書の丁寧な書評である。

なお、文化摘録欄には朝日新聞の記事として、綜合雑誌6種が3種に、その他の雑誌合計4000種が半数以下に整理される方針との記載がある。(4-1：7)『読書人』の終刊もこのためである。他には幡掛正浩の歌があり、「六百年の武家のおごりを今にしてうつつにみむはあにたへめやも」と詠まれている。(4-1：13) 幡掛は、中野正剛の1943年10月27日の自刃後、当局の監視はさらに厳しくなり、「全く言論と行動の自由を奪はれてしまった」と回顧している。(幡掛：373)

編集後記に「御製を仰ぎ戴き奉る心情の現れを出版界に又雑誌界に見出し得る事」を喜ぶと書くのは、「何十年前から　御製拝誦を言はれて来た」三井への敬意も込めてのことであろう。(4-1：62) なお、おそらくは社員たちによる俳句と歌もここに掲載されているものの、政治批判的なものはない。

第2号の表紙には、野村重臣の「綜合雑誌批判」、田中忠雄の「文化史観を正す」が並びたち、戦闘的な雰囲気を漂わせている。巻頭は浅野晃の連載第7回、続いて田中である。田中は文化史家の高踏的な自負を批判し、「文明の功利主義的方向を斥けて、文化の理想主義的方向に就」けば事足

れりとはならぬとする。(4-2：5)

「さういふところから、西田哲学的俗論の批判に就いても、批判者の態度が学問的でないといふやうな漠たる印象的風評の類がささやかれるのである。この種の風評は、私語の形であるだけに、或る意味では却って重大であって、学問的といふことが自明の概念として通用する事態の中に、旧来の陋習の抜き難い一点が見られるのである。そこには、文化価値の絶対性に対する抽象的な情熱や信仰があって、みたみの感覚の浸透を最後まで遮る有力な要素をなしてゐる」。(4-2：5)

田中は「文明開化の洗浄」を主張し、村岡典嗣の『日本文化史概説』と西田直二郎の『日本文化史序説』に特に敵意を示す。(4-2：5-8) 田中によれば、それらは実は、「皇国の民をして世界的市民に解消する」危険なものなのである。(4-2：8) さらに田中は和辻哲郎の『日本古代文化』を取り上げ、「神典を人間学的文化史観の対象に引き下す」と弾劾している。(4-2：8) 当時、京都帝国大学教授の西田は国史編修準備委員会委員であり、5月には、東北帝国大学教授の村岡とともに文部省教学局の古典編修部調査嘱託に就任する。(長谷川：273、171-172) 田中による歴史家への攻撃は、前年第12号の座談会から継続しているのである。

田中の次は野村重臣の「出版事業整備と綜合雑誌批判」である。野村は同志社大学法学部を卒業し、法学部助教授の時に同僚の林要教授をマルキストと弾劾し、騒動の末に退職させられていた。(赤澤：49-51) その後は民法学者から転じて思想戦の専門家となり、この頃は大日本言論報国会常務理事・調査部長である。野村は1943年10月刊行の『現代思想戦史論』で、「国内の敵性思想は何を措いても第一に撃滅することを必要とする」と主張していた。(野村：序2)「国内思想戦を回避して、敵性思想と妥協する総親和論の如き」は「分裂主義的厭戦思想である」、とするのである。(野村：序2-3)

このような野村にとって、出版事業整備は「思想戦上の性格」に重点を置く質的な問題なのであり、出版実績や用紙不足といった量的な問題となってはならないものであった。(4-2：9-10) 綜合雑誌として長い伝統と

高い人気を誇る『中央公論』と『改造』も、その例外ではないのである。

野村によれば、『中央公論』と『改造』の歴史の古さは、「日本が絶対に許容し得ない敵性思想 ―― 民主主義、国際主義、共産主義 ―― の第五列的宣伝雑誌」としての伝統である。(4-2：11) しかも、『改造』は細川嘉六論文、『中央公論』は「京都学派の諸君の反國體的、反軍的、敗戦的評論」や谷崎潤一郎の小説、岸田国士の戯曲掲載という事件を起こし、昨年に再出発を期さざるをえなくなっている。(4-2：10) しかし両誌は、はたして「完全転向」しうるものなのであろうか。(4-2：11)

野村は、「中央公論と改造の伝統は共に許すべからざるものであり、その伝統の故にその存在を否定さるべきもの」とする。(4-2：11) 人気の高さはその伝統と不可分であり、対内的あるいは対外的に思想戦での利用価値があるという主張は誤りであると断言するのである。(4-2：11) そのうえで野村は、他の綜合雑誌にも言及し、『日本評論』は自由主義的性格が直らぬがゆえに否定すべきであり、『現代』と『文藝春秋』の編集方針は健全ながら、それぞれの発行元である講談社と文藝春秋社が良くないとする。(4-2：11-12) 野村の評定は、信頼に値するのは日本主義綜合雑誌として一貫する『公論』のみ、ということであった。(4-2：12)

その際野村は、『公論』はあまりに「ポレミーク」であり「建設的」ではないとの批判があると認め、この批判は『読書人』にも該当するとしている。(4-2：12) しかし野村からすれば、「京都学派攻撃、偽史撃砕の思想運動」などは「国体護持の志」からの「信念的実践」に他ならず、それを批判する方が「反省すべき」なのであり、「新日本教学の体系的樹立」を決意して建設的となればよいのである。(4-2：12)『公論』が「米、英思想、ユダヤ思想撃滅、國體護持、皇道宣揚の思想聖戦」を完遂して、「米、英人も重慶要人も耽読する」に至ることが「対敵思想戦」の勝利となる、というのが野村の結論である。(4-2：12)

野村の戦闘的な姿勢は、波紋を広げたようである。中山定義海軍中佐は、3月3日付の野村宛質問状を作成し、栗原悦蔵海軍報道部長に対して、調査課員として発出するか報道部局員から発出するかの伺いを出している。

中山は質問状に、野村の「高論は一部識者の注目を惹」いたと記し、京都学派批判の論拠などを具体的に文書で返答するよう要求している。（海軍省：405-406）筆者私蔵の『京都哲学批判』と題する冊子は、著者名も奥付もないものの、内容的に返書となっており、野村が質問状に対して、分厚い報告書で返答したのではないかと推測する。この冊子は謄写版印刷で245頁に及び、御質問に答えるとして、西田哲学、田邊哲学、和辻哲学、三木哲学を「理論的に」批判するものである。（［野村］：3-4）

森本忠は、「田中君のやり方は、それでもいくらか学問的だったが、野村氏のやり方は暴力的だった」と戦後に回想し、「言論報国会が思想暴力団だとの非難」を招いたと記している。（森本：169）1944年10月には、「新聞社などジャーナリズムと対立していた」野村は辞職し、朝日新聞社の森本が後任となる。（赤澤：86）機構改革により、この頃の野村は常務理事・実践局長であった。

なお、野村は文末に、綜合雑誌の整理は「校正中に」決定が下りたと記している。（4-2：12）文化摘録欄には「公論・現代・中央公論のみが残存」として、情報局の裁定を得たうえで日本出版会が1月19日に申し渡したと記されている。（4-2：63）『改造』は時局雑誌、『文藝春秋』は文芸雑誌、『日本評論』は経済雑誌とされ、残存誌には「編集機構の強化刷新」が条件付けられての申し渡しである。（4-2：63）

野村の次は林信の「民族と神 —— 時の智慧」と題する随筆である。「開化病から快癒」するために、外来文化を偶像とせず、「異郷の神を拝む民族は己が血を穢すことなくしてはその歴史をつくりえない」ことに思い致すべきである、とする。（4-2：13、44）その後は新著月評である。新規は経済の西谷彌兵衛、国文学の袖崎修、哲学の前澤雅男、思想の村上次男、科学の小野勝次と荒木俊馬であり、継続は産業の橋野登と児童読物の佐伯郁郎である。

西谷は、幕末における「草莽の志」や「経済的自由主義」の害悪を経済史家が看過すると批判し、「「開化派」的史眼」からの脱却を説く。（4-2：16-17）西谷は、1943年6月刊行の『日本経済頌』で、「天皇陛下万歳の

絶対値に安住することのできない「思想家」」と大熊信行を指弾した人物である。（西谷：112）大熊はこの攻撃できわめて深刻な危機感を持ち、他の攻撃と合わせて自分が「包囲陣のなかにある」と痛感したと戦後に回想している。（大熊：32）その西谷を経済担当としたことは、やはり『読書人』は大熊の敵側に立つ、ということなのであろう。

袖崎について森本忠は、後藤積とともに大日本言論報国会事務局に入れてもらった、と回想している。（森本：137）袖崎は「歴史への信」を語り、「わたくしごころにもとづく歴史の合理化」を排斥している。（4-2：18-19）前澤は田中忠雄の『道元』を称え、橋野は月給制の導入を推奨し、企業に「勤労者が日々国家に対する忠誠を発揮するに遺憾なからしむる配慮」を求めている。（4-2：23-24）佐伯は南方関係の少国民図書の内容が小説としてお粗末すぎると嘆き、（4-2：26）京都帝国大学文学部地理研究室嘱託の村上は、国土学や国土計画の研究がなお途上にあると指摘している。（4-2：28）科学は前年第10号以来であり、小野は数学、荒木は中国の天文学の一般書を推奨している。

続いて座談会「編集者の道」である。参加者は房内幸成、講談倶楽部編集長の萱原宏一、新女苑編集長の神山裕一、文藝春秋編集部の下島連、講談社学術課の糸原周二である。巻頭に配置しても不思議ではない企画である。

座談会ではまず房内が、雑誌や出版は今日「国民の教育機関になって」いるとし、ちょうど今日、出版の「要路の人」に会った際に、悪い綜合雑誌をぜひつぶしてほしいと説いてきたと述べている。（4-2：31）これに応じて下島は、「雑誌の性格は編集者の考へによって決定される」とし、（4-2：31）最近の「思想問題」として以下を挙げている。すなわち、1942年の「国字変革案」、1943年の「国民学校の国史教科書の問題、京都哲学の問題、偽史の問題」、「最近殊に「読書人」が非常に力を致してをります皇国史観の問題」である。（4-2：32）下島は、これらは「識者とか専門の学者」が提唱し、「伝統或は國體」を護る人々の「憤りにふれ」、戦時下に「無用の摩擦」を引き起こしたと総括している。（4-2：32）

他方、萱原は、企業整備の基準が何誌残すかの数値目標に移ってきているとし、「性格」によって行なう当初の基準の堅持を日本編集者協会を代表して当局に求めたとする。(4-2：32-33) これに神山も賛同し、精神よりも物を具体的と考える弊風を指摘する。(4-2：33) そこで房内が、精神や思想を論じる方が「時務論」よりも重要であると分かっている当局者、出版業者、編集者が実は非常に少ないのではないかと懸念を表明する。(4-2：34) 房内は『読書人』は「堅い決意」を持つとし、これに応じて「記者」は、力足りぬものの「君臣の大義を正す」ことをひたすら考えていると答えている。(4-2：34)

「でも有難い事には力を合せて下さる方々が沢山あり、殊に読者の中で国民学校の先生方は読む本ががらりと変って来て、本当の意味の良い本悪い本の判別が出来るやうになったと言ふ声を聞かせて下さいます。それは全国的にあります。或はインテリ文化人と覚しき人からは色々批難めいた言葉を聞きますが、それはさうあるべきで何かの機縁になると言ふ意味でいいと思ってゐます。昨年は哲学書評や史観を正すをやって大反響を呼んだ訳ですが大体、米、英撃滅の悲憤の思ひを何処かへ逃してしまふやうな考へや皇国の歴史を唯物史観や幕府史観でやられるとしたなら我慢して居られますか。ここの処へ何うしても来てしまふんです」。(4-2：34)

答えたのは石井良介であろうか。房内はさらに、『読書人』が「国内の相剋摩擦を惹き起す」との非難を紹介して意見を求め、下島と萱原がその不当を断言し、下島が「皇国の歴史に照らして絶対に間違ひのないといふ所に基礎を置いて言論活動をやってゆく以外に我々の行き方はない」と結論付ける。(4-2：34-35) 房内は、下島と萱原が幹部である日本編集者協会の活動に期待を表明し、(4-2：35) 下島は執筆者と編集者の志での結び付きを主張し、萱原は大衆の健全性を力説する。(4-2：36-37) おおむね、房内、下島、萱原、記者が連携して話を進め、具体的な編集作業では迷いもあると述べたりしつつ、(4-2：41-42) 当局は「指導といふ所を余程深く考へて戴かないと困る」との注文を付けて座談は終わっている。(4-2：44)

『文藝春秋』の存続を懸念する下島の発言から判断すると、この座談会は綜合雑誌の決定以前の開催である。(4-2：38) 他方、房内は、足利高氏や北条義時、泰時を擁護する歴史家が国史編纂の準備委員に入り、その著書が文部省推薦の優良図書になったと憤慨している。(4-2：37) 前年の史観問題の標的への言及なのであろう。なお、編集後記には、出版事業整備の動きは「楽観を許さざるもの」との危機感が記されている。(4-2：67)

中央公論社の黒田秀俊は、本号を読んで野村重臣に会見を申し込んだものの、3回訪ねても会うことができなかったそうである。(黒田 1966：55) 東京堂も訪問し、「石井某という若い編集部員」と話をしたものの、「しどろもどろで、とりとめのない」有り様で、編集部として「おそらくはっきりした方針はもたなかったのであろう」としている。(黒田 1966：55) 少なくとも、中央公論社側が反応するほどの影響力が『読書人』にあった、ということであろう。

それでは、編集方針は実はなかったのだろうか。国民文化研究会が1977年に三井甲之の『明治天皇御集研究』を再刊するに際して、理事長の小田村寅二郎は、「畏友・石井良介氏のご尽力で、東京堂からのご了承が得られ」たと記している。(三井：4) 小田村は三井甲之、蓑田胸喜の指導を受け、日本学生協会で活動し、東條英機政権を批判して1943年2月に同志たちと検挙された人物であり、(井上：162-163) 国民文化研究会はこの戦前の学生運動の道統を継承して1956年に発足したものである。(小田村：14-16) 石井はその小田村に「畏友」と呼ばれている。渡邊保夫、高橋利久とともに石井にも思想的信念があり、その信念が『読書人』の編集方針を裏付けていたと見るべきであるように思われる。

第3号は大半が新著月評である。文化摘録欄では東京堂が書籍発行所として承認されたことを伝えている。(4-3：44) これは日本出版会による大規模な出版企業整理による決定である。(東京堂：411)

新著月評は10名が担当し、久々に充実している。新規は科学の室賀信夫、教育の幡掛正浩、国文学の川端康成、文学の房内幸成、小説の海音寺潮五郎、再担当は文学の檀一雄、継続は経済の西谷彌兵衛、文学の袖崎修、

産業の橋野登、阿部隆一は今回は文学である。10 名中 6 名が文学関係である。

西谷は、経済史観への注目は編集部の希望であり、たしかに決定的に重要であるとする。(4-3：2) 袖崎は蓮田善明の『神韻の文学』、檀は保田與重郎の『芭蕉』を絶賛する。なお檀は、中谷孝雄は少尉としてニューギニアにいると記している。(4-3：10) 橋野は食糧増産技術を論じて、「憂国熱血の学者」である大井上康の農法を支持している。(4-3：14) 京都帝国大学文学部講師で地理学者の室賀は、日本の後進性という「迷信」を批判し、中谷宇吉郎の叙述の姿勢に疑問を呈している。(4-3：18) 幡掛は、文部省図書監修官の竹下直之の真摯さを認めつつも、叙述に自負が強すぎると疑問を呈している。(4-3：20) 川端は、国史国文では良書が出るようになったとし、近刊書を多数熱心に紹介している。(4-3：22-23)

房内は「教育の復古維新」を説き、古事記や万葉集を児童向きに平易に、すなわち安易に解説しようとすべきではないと主張する。(4-3：25) さらに、解説書を推薦図書とする「文部省の根本精神」も「近代的なるものを少からず孕んでゐるのであらうか」と批判して、房内は、文部省の児童教育方針に疑問を突きつけている。(4-3：26) 阿部は日本評論社の『東洋思想叢書』を推奨し、マイスター・エックハルトやヴィルヘルム・ディルタイ関係の翻訳書が精神史への理解を深めることを歓迎している。(4-3：27-29) 海音寺は、当局も国民も努力しているのに、戦力増強が「思ふやうに効果があがらない」と率直に指摘する。(4-3：30) 文学も同様であり、「正気発動の根元となる気質を養ひ、魂を純化する」ことを忘れていては、効果を現わすはずもないとするのである。(4-3：31)

新著月評の次は、田中忠雄の「綜合雑誌 2 月号評 —— みたみの祈り」である。田中は、綜合雑誌はおおむね「面目を一新」し、一部は「類型的な無気力状態」にあるとする一方、(4-3：33)『現代』掲載の三井甲之の論考に言及し、「志向するとこころの相違の甚だ深いことをつくづくと嘆じた」と記している。(4-3：34) 西郷隆盛が漢学に囚われて「シキシマノミチの惟神道」に進まなかったとの批判は、「筆者の如き「シキシマノミ

チ」の素人」には分からないとし、かたかなを敢えて用いるのは「異様」ではないかと正面から疑問を呈している。(4-3：34) 実に的確な批判である。

田中はさらに、『改造』の座談会で民意昂揚が深刻な課題とされたことについて、「合理主義的革新の志向」では不可能であるとし、「神慮をかしこみて一念奮起する」しかないとする。(4-3：34-35)『文藝春秋』で澤瀉久孝が、「見を異にする人達への態度の礼」を問題としたことには、「やむにやまれずして邪道の撃攘をなす」のは非礼なのかと反論している。(4-3：35)『公論』については、評価するものの「いまだすっきりと一本になり得ない憾み」と記していて、真意はよく分からない。(4-3：35) 田中の後には、浅野晃の『維新史覚書』連載第8回、秦一郎の『鷗外断片』連載第2回のみである。

第4号は終刊号である。冒頭の「終刊の辞」には「われらは武器を失ひたり、思想戦の武器を失ひたり」とあり、読書人編集部として以下の報告がある。(4-4：2)

「発刊以来4歳を閲して今日に及べる雑誌読書人は、いま読者諸兄姉の手にある本4月号を以て終刊の已むなきに至れり。われら微力にして到らざる処多しと雖も、稽古照今の道に則り醇乎たる国風の維持に日夜心肝を砕き来れるは神霊の照覧したまふ処なり。歴史の生命を蝕むものは之を正し、皇国一貫の道に発するものはこれを顕揚し、聊か草莽の微衷を致し、更に現下皇国一大事の秋に当り彌々至誠奉公の事を契ひ、相励まし相携へて当初の志を継がむとし、この言論の公器の永続すべきをひたぶるに祈りてありしに、思ひきや、渓声山色漸く新たなる3月に至って究如日本出版会より廃刊を命ぜらる。出版企業の数量的整備の原則以外には、何らその理由を詳かにせず。微力の故か、誠のなほ至らざる故か、痛哭悲泣言ふ処を知らざるなり」。(4-4：2)

編集後記には部員たちの歌が掲載され、石井良介は「しこ草のしげる野山にわけいりて利鎌もがなと思ひけるかも」と詠んでいる。(4-4：72) 国内思想戦への意欲が尽きないようである。本号は、本文55頁と近年にな

く多いものの、構成に特別の変化はない。存続できると誤認していたのかもしれない。

冒頭は浅野晃の連載第9回であり、続いて西谷彌兵衛の「維新史観と総力戦」である。日本経済史観を正す作業を継続する西谷は、「開化派の進歩的意義を宣揚」する誤りを指摘している。(4-4：6)「尊攘の精神」こそは「日本の伸長を支へた」のであり、昭和維新が「いはゆる米英的なるものを国内から一掃せんとする内なる維新」を必要とするのは、「開化派的思潮」との決着がまだついていないからである、と主張している。(4-4：8)

その際、西谷は、尊皇思想を「近代国民主義」として捉える和辻哲郎も、「明治維新とその発展の跡」を「西欧資本主義革命」との対比で捉える土屋喬雄も、「神州不滅なりとする根本」を失っていると批判する。(4-4：9) その根本を信じる西谷は、「大産業、大金融資本」は国難に何ら挺身してこなかったと日本資本主義を断罪し、経済維新を成就できず「経済の米英化を通じて侵入し来るユダヤ勢力の国内攪乱の端緒が形成」されてしまったことを悲憤するのである。(4-4：9-10)

西谷に続いて林信の「民族と神」の連載、清水文雄の「然れども言挙ぞ吾がする」がある。清水は蓮田善明の友人であり、『文藝文化』同人である。(4-4：17) 松本善之助の「有職故実の学問」を経て、豊川昇が紀平正美の近著『皇国史観』を「歴史への参入」であると絶賛している。(4-4：20) 新著月評の記載はないものの、豊川の頁上部には歴史と表記されている。この後は袖崎修の「ふる道の誘ひ」である。袖崎はここで、「アララギズムが夷狄の感覚を以て言の葉の道を乱す」とし、その一派は「所謂歌壇幕府を形成」していると憤りつつ、(4-4：23) 中谷孝雄の『梁川星巌』、房内幸成の歌集『不知火』など、近刊の「よい書物」を好意的に紹介している。(4-4：22-32)

袖崎の次は前澤雅男による浅野晃『明治の精神』の推奨である。思想と頁上部に表記されている。前澤は、「西戎風の文明開化思潮の謀略」に屈しなかった明治天皇と「草莽地下」への追慕の念を示している。(4-4：

34）その後、文学の森本忠が「純潔玉の如き ―― 神風連烈士遺文集」を紹介し、村雨退二郎が「伝記文学の弱点」として、近時の人物を描くと関係者に配慮せざるをえないことなどを挙げている。（4-4：38-39）さらに村雨は、安易な伝記小説と区別するために、歴史文学という呼び名を用いるべきとしている。（4-4：41）講談社の萱原宏一は、前号に執筆した海音寺潮五郎を「歴史文学の興隆」を実現させた「功労者の一人」とし、村雨はその海音寺の「盟友であった」と回想している。（萱原：196-197）

交通の村上次男は、「資源及び経済偏重の思想」を批判し、精神偏重による誤謬もあると認めつつも、「ベイエイ的世界征服の為にする従来の学識」では「大東亜を欺瞞の天地」にしてしまうと警告している。（4-4：43-44）続く倫理の植田清次は初担当である。植田は、道徳が近年「国民的性格において」理解されるようになったとし、和辻哲郎、杉森孝次郎、西晋一郎の著作を紹介している。（4-4：45-46）さらに植田は、柳田謙十郎の近著の努力を評価しつつも、柳田に限らず、倫理学で科学技術の問題にもっと取り組んでほしいとの希望を表明する。（4-4：46-47）植田は早稲田高等学院教授であり、以前の『読書人』のような、しっかりとした読み応えのある近刊書評を行なっている。

植田の後には内藤純夫の「世継ぎの日の文学者として」、編集部の故渡邊保夫の俳句、房内幸成撰の和歌、秦一郎の「鷗外断片」の連載第3回で本文は終わっている。なお、本文の途中には憲法学者で歌人の井上孚麿の和歌が掲載されている。（4-4：11）井上は原理日本社の主要同人であり、葦津珍彦が畏敬し、東條英機政権と対決する際の憲法学的根拠を仰いだ人物でもあった。（葦津・西田・西澤：503-516）この頃は国民精神文化研究所所員である。

本号には、第3章で言及したように、創刊号に執筆した秋山謙蔵に対する富澤襄の弾劾がある。1941年刊行の『日本の歴史』で秋山は、客観的に批判されて正しいものを良しとするとし、徳川幕府は天皇中心の政治を輔翼しようとしたなどと書いていると富澤は指弾する。（4-4：49-50）歴史家としての見識を問い糾すのである。「敵の戦艦数隻、航空母艦十数隻

内南洋に迫っても、日本の運命を決定するものは決して敵の情勢ではなく、我々が天祖の神勅を奉ずるか否かにかかる」との富澤の主張の方が、(4-4：48) 情勢論を否定して日本の道の信念に生きようとする『読書人』の編集方針に、実は当初から合致していたのではないだろうか。

おわりに

本稿では3回にわたって、書評誌『読書人』の創刊直前から終刊号までの誌面を追跡してきた。その編集方針は、結局、第1章で紹介した保田與重郎の主張によって言い尽くされたように思われる。保田は『東京堂月報』第28巻第9号で、「編集方針を、知識から精神にかへる必要がある」と説いていた。(東京堂月報 28-9：4) たとえ知識は正しくても、著者の精神が正しくなければ有害な出版物であり、まず精神を正してのみ、知識の活用は害をもたらさない、とするのである。

ただし、繰り返しとなるが、それは『読書人』が保田の直接の影響下にあったということではないと考える。たしかに、保田と近い人々が多数執筆し、後半になるほどその割合も高くなっていった。『文藝日本』の同人たちの多さは、『読書人』がその出張先の同人雑誌のように思えるほどである。しかし、田中忠雄にも紀平正美にも、三井甲之と蓑田胸喜にも、それぞれ独自の思想的こだわりがあった。それにもかかわらず保田の主張とつながるように見えるのは、国内思想戦を意欲する人々に共通する姿勢、すなわち、他者を否定する傾向と知的な探究を重ねる生き方への敵意があったからではないだろうか。その意味で、『読書人』は日本版の反知性主義の雑誌という性格を露わにしていった、と位置付けられるように思われる。『読書人』編集部の「精神」と言っていいのかもしれない。

さてそれでは、『読書人』誌上の弾劾者たちは、どのような立場で執筆していたのであろうか。この弾劾の背後には陸軍がある、あるいは大日本言論報国会があるなど、戦中も戦後もさまざまな背後関係が推測されていた。実際、一部の弾劾者は政治権力や統制団体の威光を背負っていた。し

かし弾劾者たちには、組織の一員と組織の利用者という立場の二面性があったように思われる。たとえば、阿部仁三嘱託と陸軍、小沼洋夫教学官と文部省との関係には、阿部や小沼という知識人の思想が入り込んでいたはずである。京都学派への攻撃は知識人としての覇権の争奪戦でもあったし、『中央公論』への攻撃は執筆誌面の争奪戦としても理解することができるであろう。国内思想戦は言論空間の争奪戦であり、その戦いは、組織のみならず個人としても遂行されていたのである。

これに加えて、言論空間を考えるに際しては、編集者を出版社社員としてのみならず知識人としても把握する視点が必要であろう。他の雑誌でも、編集者の思想や編集方針は従来から重要であったし、『読書人』の場合も、単に経営上の理由ではないこだわりが、編集後記からひしひしと感じられる。言論統制と企業整備のなかでの雑誌編集には、もとより通常よりはるかに経営上の工夫が必要となる。しかし、それに止まらない熱意が、『読書人』編集部の論調には感じられるのである。

とはいえ、とりわけ1940年代前半の言論空間は、政治権力によって完全に条件設定をされていた。講談社の萱原宏一は、「用紙は出版社の食糧」であり、「これを軍官に一手に握られ、しかもその配給は、軍官の出版物の内容につける点数によって、増減または停止されるとなっては、勝負はあった」と回想している。(萱原：258) 萱原は、1940年12月の日本出版文化協会の誕生が「軍官の言論統制と思想統一を決定的に強化した、画期的な出来事であった」とし、同月発足の情報局が「諸官省の指導方針を統一し、同局を通じて指導を一元化する建前を採った」と指摘するのである。(萱原：258)

ただし萱原は、この建前がまったく貫徹されなかったと指摘する。権力的一元化の試みは、往々にして乱打戦を招来するのである。

萱原は、「結果は情報局の指導が一つ殖えただけ」で、当時の雑誌編集長は次から次へと会議を回らなければならなかった、と回想する。(萱原：258) すなわち、情報局出版課、日本出版文化協会雑誌課、陸軍省報道部、海軍省軍務4課、陸軍航空本部、大政翼賛会文化部の会議があり、

内務省、警視庁、憲兵隊等からの呼び出しがあり、さらに鉄道省、逓信省、大蔵省、軍事保護院、満洲国大使館等から臨時に招集を受けた、とのことである。（萱原：258-259）このような会合では、編集長は基本的に「軍官の意向を拝聴」するだけであり、時には個別に、他での決定と異なる要望への「善処」を求められもした。（萱原：259-260）「一見縄張りを捨てたような顔をして、その実、がっちり握って離さない」官僚の「縄張り意識」について、萱原はあきれた口調で証言している。（萱原：260）

そうであれば編集長としては、安全な執筆者に依頼するようにもなるであろう。『読書人』後半の常連執筆者たちは、他の雑誌にも多数の執筆を行なっており、思想的な共鳴のみならず、経営上の都合という事情による依頼もあったと推測される。編集者には出版社社員としての立場があり、この時期に「事件」を起こせば当局の査定に響きかねないのである。

ところでこの査定者たちについても、組織の一員と個人との二面性が指摘されている。中央公論社の嶋中雄作は、1948 年に戦時期の苦衷を振り返り、日本出版会が日本出版協会に衣替えして、そのまま出版業界を牛耳ろうとすることへの憤激を以下のように記していた。

「私ははっきり言いたい。―― 日本出版協会は戦後一度解体して新たに再建されなければならなかったのだ ―― と。これを要するに、日本の出版文化行政というものは用紙割当行政であって、その方法は個々の出版物の内容を検討して甲乙丙丁等に頒ち、その等級に応じて紙の割当を決定したものである。これを査定と称して当時の出版文化協会及び出版会の主要事業となっていたのである。ところで個々の雑誌及び書籍の内容判定は事実上査定者の主観的判断によって左右されることを免かれないから、出版行政の実体はこうした査定者群によって握られることになったのである。この点は非常に重大なポイントで、用紙割当行政に限っては査定者個人の主観的判断が行政の中核をなしていたということを忘れてはならないのである。そうしている間に、かれらは絶対的権力によってあらゆるデータを集め、活殺自在の剣を揮うと同時に、貴重なる資料に関する知識を習得したことも事実である。そこで問題は戦時出版統制を担当した人間の集団が、

終戦後３年の今日においても、同じような権力を握り、またその権力を持続せんとしていることである。実にかれらを育成した環境そのものがいかに間違ったものであったかは、今では誰でも知っている。それをそのままにしておいて新らしき酒を盛ろうとすることは、私は絶対に無理だと思うのである」。（嶋中：44-45）

言論統制を行なうのは組織であり、時に組織の中にいる個人でもある。国内思想戦を行なうのは個人であり、時に個人の背後にある組織でもある。言論統制下の国内思想戦では、組織と個人の闘争が絡み合い、言論空間の縮小とともに、闘争は激しさを増していった。東條英機政権による言論統制政策のますますの強化と、用紙不足などによる企業整備の断行には、編集者への企画審査や当局からの「要望」といった水面下の統制も加わっていた。この環境に適応することは、言論活動を断念しない限りは避けられない状況である。

『読書人』はこの環境に意欲的に適応し、国内思想戦を担うことを自己の使命としていった。良書を推奨し、悪書を排撃することを編集方針としたわけである。ただし、何を良書とし何を悪書と判断するかは、まさに、個人の判断に委ねざるをえない。執筆者、編集者、査定者、当局者などの判断に委ねざるをえないのである。

そのため、『読書人』の前半で推奨された書物が後半では排撃され、前半に書評を担当した執筆者が後半で排斥されたりもした。東京堂の書籍の監修者が、東京堂の雑誌でその精神を糾弾されたりもした。さらにまた、弾劾者たちも安泰ではなく、哲学そのものが日本には不要であるとか、文学は戦時に必要ないとか、さまざまな攻撃を受けた形跡が見え隠れする。まことに、縮小する言論空間では、競争相手を言論空間の外に押し出した後には、今度は自分が誰かに押し出されることを警戒しなければならない。ここでも乱打戦が繰り広げられるのである。

言論統制政策の担い手と、言論空間への参入者は、それぞれに乱打戦を展開しつつ、乱反射的に関係を持つ。日本出版文化協会の内部対立は、この絡み合った闘争の一例であろう。

『読書人』による京都学派への攻撃は、京都学派の背後にある海軍への攻撃となり、正史編修に参加する歴史家への攻撃は、参加を認める文部省への攻撃になる。しかし、京都学派の背後にあった高木惣吉は、東條英機政権期の海軍主流派ではなく、京都学派が連携したのは海軍なのか、海軍の高木惣吉なのかは実は判然としがたい。また、小沼洋夫の文部省での立場について、昆野伸幸は小沼の西田批判、和辻批判は「教学局の総意」とは言い切れないとし、むしろ紀平正美、山田孝雄との思想的共通性を指摘している。（昆野：383）組織内の人間が個人的に動いて組織を動かそうとすることも当然あるであろうし、そうして組織と人間の関係は、政策や思想が対立する局面で特に乱反射的に働いていく。

もとより、この時期の言論は、語れることの狭い環境にある。京都学派の秘密会合で書記をつとめた大島康正は、『中央公論』での公表の際には「会合でしじゅう論議されていた東條批判や陸軍批判」はすっかり消されたと 1965 年に証言している。（大島：283）大島は当時、京都帝国大学文学部副手である。（大橋：13）ただし吉田傑俊は、海軍が英米派や非戦派であったとは言えず、海軍への協力をもって政治関与が積極的に評価されるものではない、と指摘している。（吉田：27、303）たしかに、海軍が陸軍よりも優秀な組織であったわけでは全くなく、海軍との協力が知識人の名誉になるというものでも全くなかった。

なお、玉木寛輝は、高山岩男などの構想が「軍事を一定程度相対化する政戦戦略・総力戦論」に及ぶものであり、思想戦はその一環であったと位置付けている。（玉木：199-200）そのうえで玉木は、海軍と提携する知識人や南京東亜連盟所属の中華民国の知識人からも京都学派の主張に批判があり、他方で戦局が好転せず対外思想戦に不利な状況が続いたことを指摘する。（玉木：196-198）京都学派の活動にも高木惣吉の活動にも、『読書人』の弾劾とは別に、さまざまな限界が立ちはだかっていたのである。

それゆえ、このような悪条件の環境からの自発的な撤退は、有効な選択肢である。高坂たちの恩師である西田幾多郎は、「世界史的立場と日本」の『中央公論』誌上への公表に、「「よせばいいのに」と、困ったものだ、

という風情をあらわに示した」と、中央公論社の雨宮庸蔵は回想している。（雨宮：406）また、竹田篤司によれば、田邊元は下村寅太郎宛の 1943 年 7 月 1 日付書簡で、「此程の中堅諸君の対世間的活動は、少し世の中の要求（と申すより一部はジャーナリズム）に引廻され過ぎの傾無きかと疑ひます。もっと自己内集中に傾いてもよくはないでせうか」と記している。（竹田：228）『読書人』の哲学書批判号発売の日付けである。はたして当号を読んでの書簡かどうかは不明ながら、結果として、京都学派の「対世間活動」は急速に消えていくこととなる。当時の田邊は京都帝国大学文学部教授で定年間近であり、秘密会合にも時々は参加していた。

京都学派の背後に広がるこのような文脈に相当するものが、弾劾者たちの背後にもあったのかどうか。言論統制下の国内思想戦で外部から見ることのできる部分は、実際のごく一部分である。組織と個人の関係にしても言論の内容にしても、外部から見ることのできない部分は多い。それゆえ断定はできないものの、民間から自発的に言論を統制しようとした『読書人』が、言論統制の公的な担い手たちから存続への支援を受けられなかったことは、たしかである。

雑誌の整理は 1944 年 5 月末にほぼ完了し、従来の 2017 誌は 996 誌となった。（荘司・清水：219）『東京堂の 85 年』は「昭和 18 年頃からの書評雑誌を逸脱した編集内容や思想傾向が禍いして、昭和 19 年 4 月号限り廃刊を命じられた」と記している。（東京堂：412）しかし、どのような理由であったかを確認することは、実際にはできなかったのであろう。国内思想戦に過剰なほどに適応した『読書人』が、はたして「編集内容や思想傾向」によって排除されたのかどうか。あるいは、日本出版会の『新刊弘報』や『日本読書新聞』の競合相手として排除されただけなのかもしれない。

いずれにせよ、組織や個人がさまざまに交錯する一面を示してきた『読書人』は終刊した。その誌面の内容がどうであれ、良書を決定することの権力的一元化の動きは、それによって、その一歩をさらに前に進めたのである。

＊本研究は、JSPS 科研費 JP19K01459 の助成を受けたものである。
＊本研究は、令和 2 年度京都産業大学学外研究員制度を活用したものである。自由研究員の機会を頂戴したことに記して感謝の意を表したい。
＊本文中の註記に際し、雑誌の引用は 1 巻 2 号 3〜4 頁であれば 1-2：3-4 と表記し、適宜雑誌名を省略している。「編輯」「特輯」は「編集」「特集」と表記し、漢数字はローマ数字、旧字体は新字体に適宜改めている。
＊本稿（2）p. 94 の帆刈：237 は帆刈：287、p. 95 の自然因果応は自然因果、p. 92. 100. 104 の下島漣は下島連の誤りであり、記して訂正する。

参考文献

赤澤史朗『徳富蘇峰と大日本言論報国会』山川出版社、2017 年。
浅野晃・影山正治『転向 —— 日本への回帰』曉書房、1983 年。
葦津珍彦『昭和史を生きて —— 神国の民の心』葦津事務所、2007 年。
葦津珍彦「剛直な法学者　井上孚麿先生」葦津珍彦・西田廣義・西澤泰夫編『井上孚麿憲法論集』神社新報社、1979 年。（葦津・西田・西澤と略称）
雨宮庸蔵『偲ぶ草 —— ジャーナリスト 60 年』中央公論社、1988 年。
磯部忠正『神話哲学』朝倉書店、1943 年。
井上義和『日本主義と東京大学 —— 昭和期学生思想運動の系譜』柏書房、2008 年。
植村和秀「近代日本の反知性主義 —— 信仰・運動・屈折」『政治思想研究』第 20 号（2020 年 5 月）。（植村 2020 と略称）
植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争 —— 京都学派と原理日本社』柏書房、2007 年。（植村 2007 と略称）
大熊信行『定稿　告白』論創社、1980。
大島康正「大東亜戦争と京都学派」森哲郎編『西田幾多郎・西谷啓治他　世界史の理論』燈影舎、2000 年。（大島と略称）
大橋良介『京都学派と日本海軍 —— 新史料「大島メモ」をめぐって』PHP 新書、2001 年。
岡本拓司『近代日本の科学論』名古屋大学出版会、2021 年。
奥平康弘『治安維持法小史』岩波現代文庫、2006 年。
『追悼奥村喜和男』奥村勝子発行、1970 年。（奥村と略称）
小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』日本教文社、1978 年。
土井章監修、大久保達正他編著『昭和社会経済史料集成　第 23 巻　海軍省資料

(23)』大東文化大学東洋研究所、1997 年。(海軍省と略記)
萱原宏一『私の大衆文壇史』青蛙房、1972 年。
河盛好蔵『フランス語盛衰記』日本経済新聞社、1991 年。
栗田英彦「日本主義の主体性と抗争 —— 原理日本社・京都学派・日本神話派」石井公成監修・近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』法蔵館、2020 年。(栗田と略称)
黒田秀俊『昭和言論史への証言』弘文堂、1966 年。(黒田 1966 と略称)
黒田秀俊『横浜事件』学藝書林、1975 年。(黒田 1975 と略称)
『現代』大日本雄辯会講談社。
昆野伸幸『増補改訂　近代日本の国体論 ——〈皇国史観〉再考』ぺりかん社、2019 年。
佐藤卓己『言論統制 —— 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』中公新書、2004 年。
『時局雑誌』改造社。
『出版人の遺文　中央公論社　嶋中雄作』栗田書店、1968 年。(嶋中と略称)
下川巌(京都地方裁判所検事)『人民戦線と文化運動』東洋文化社、1973 年(原報告書は 1940 年)。
下村寅太郎『下村寅太郎著作集 1　数理哲学・科学史の哲学』みすず書房、1988 年。
荘司徳太郎・清水文吉編著『資料年表　日配時代史 —— 現代出版流通の原点』出版ニュース社、1980 年。
『戦前の情報機構要覧 —— 情報委員会から情報局まで』、出版者不明、1964 年。(情報と略称)
神社新報社編『戦後神道界の群像』神社新報社、2016 年。
仙石和道「大日本言論報国会時代の大熊信行 —— 雑誌『公論』を巡る一考察」『出版研究』37 巻(2006 年)
伊藤隆編『高木惣吉　日記と情報』下、みすず書房、2000 年。(高木と略称)
竹田篤司『物語「京都学派」—— 知識人たちの友情と葛藤』中公文庫、2012 年。
玉木寛輝『昭和期政軍関係の模索と総力戦構想 —— 戦前・戦中の陸海軍・知識人の葛藤』慶應義塾大学出版会、2020 年。
岩出貞夫編『東京堂の八十五年』東京堂、1976 年。(東京堂と略記)
『東京堂月報』東京堂。
西谷彌兵衛『日本経済頌』旺文社、1943 年。
西山正夫(池島重信)「京都哲学派弾圧の経緯」『太平』第 2 巻第 2 号(1946 年 2 月)。
野村重臣『現代思想戦史論』旺文社、1943 年。
野村重臣『京都哲学批判』刊記なし、1944 年?([野村]と略称)

長谷川亮一『「皇国史観」という問題 —— 十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』白澤社、2008 年。
幡掛正浩『冰雪よりも厲し —— 美しいこととかなしいこと』島津書房、1998 年。
畑中繁雄『覚書　昭和出版弾圧小史』図書新聞、1965 年。
花澤哲文『高坂正顕 —— 京都学派と歴史哲学』燈影舎、2008 年。
『文藝春秋』文藝春秋社。
帆刈芳之助『文協改革史』帆刈出版研究所、1943 年。
牧野邦昭『新版　戦時下の経済学者 —— 経済学と総力戦』中央公論新社、2020 年。
三井甲之『明治天皇御集研究』国民文化研究会、1977 年。
森本忠『僕の詩と真実』日本談義社、1968 年。
矢部貞治『矢部貞治日記　銀杏の巻』読売新聞社、1974 年。
吉田傑俊『近代日本思想論Ⅱ　「京都学派」の哲学 —— 西田・三木・戸坂を中心に』大月書店、2011 年。
和辻照『和辻哲郎とともに』新潮社、1966 年。（和辻照と略称）